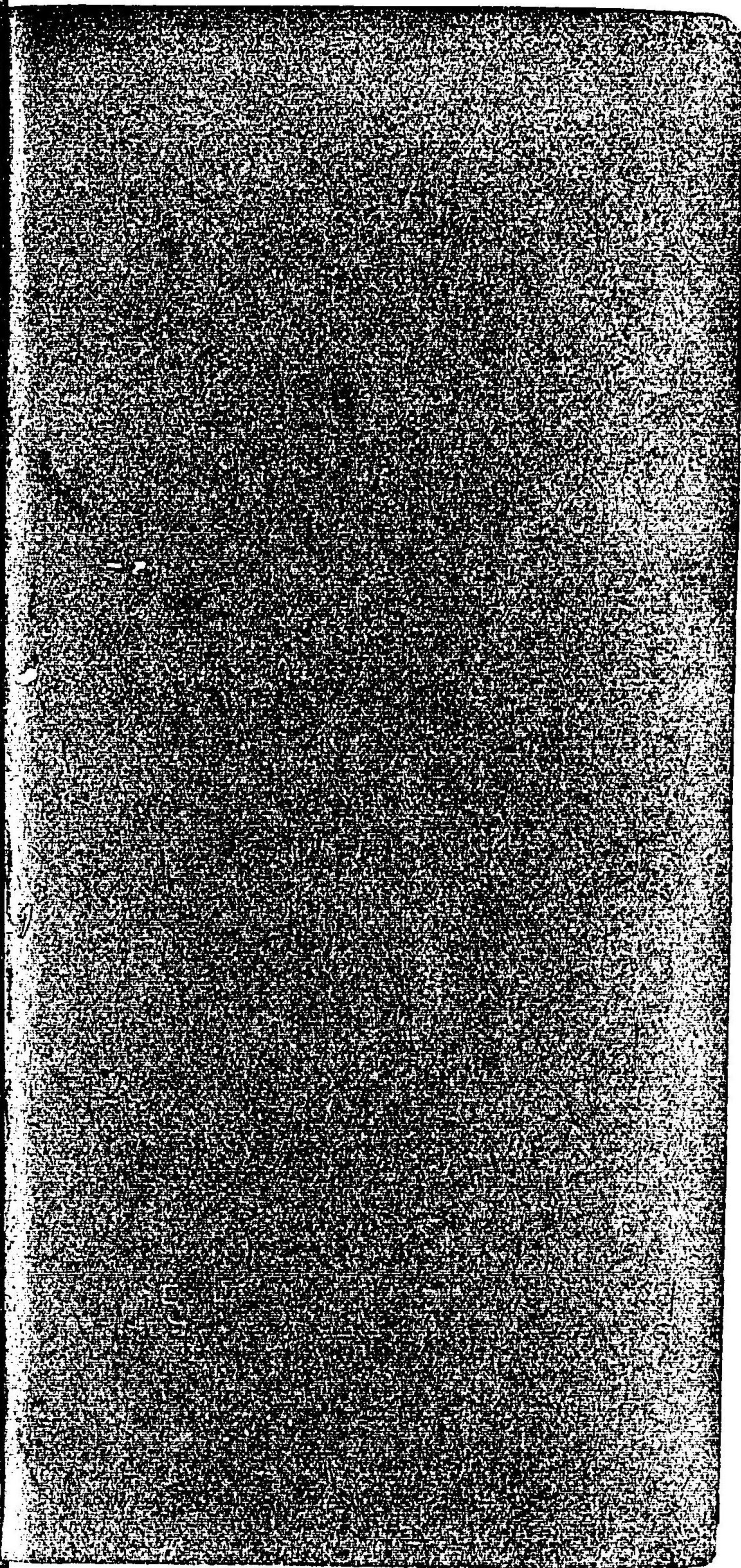


小波小品

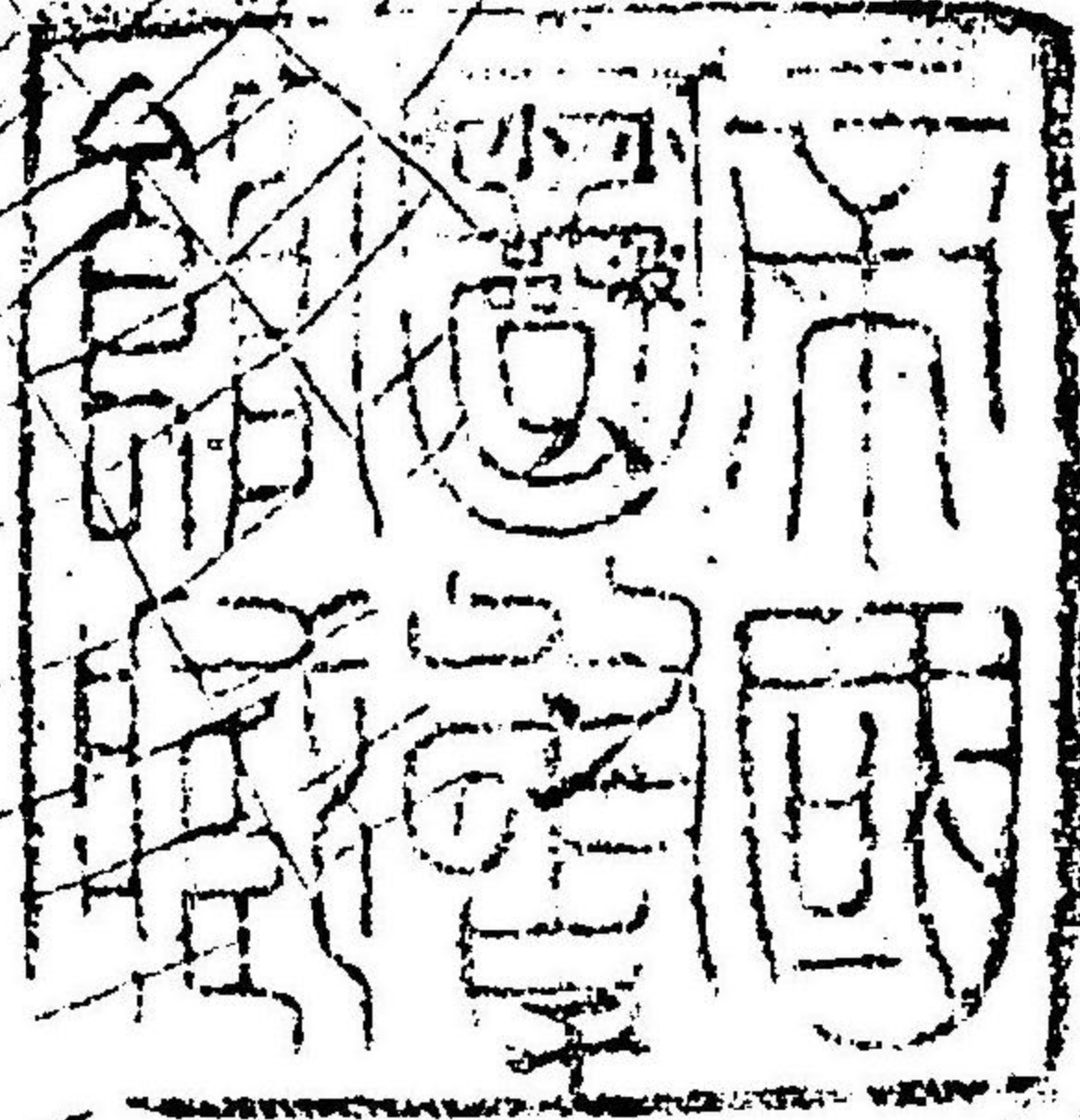
32
1
412



龍井商店書籍部發行



32-41



ツ
ク

小
波



明治 49 年 7 月 27 日



今昭君

京の名物、女は云ふに及ばず、古寺に白雲
頭、さて多きは貧乏公家ぞかし。

榮華は百人二首の昔時に留めて、源氏平
家の角突合に、此處を土俵と定られて以來、
足利と云ふ不埒者、豊臣といふわんぱく大

將、さては徳川の横着爺に、其株を巻き揚られては、關白も大臣も、
參議も納言も、名はあつてじゆつなき波世、鼻の下と共に長き袖ふ
り切れず。二位の三位のと肩書ばかり高うなりて、くらゐ倒れと世

目 次

一	今昭君	一
二	長き袖	二
三	鼻の下	三
四	關白	四
五	大臣	五
六	納言	六
七	参議	七
八	横着爺	八
九	波世	九
十	不埒者	十
十一	わんぱく	十一
十二	倒れ	十二
十三	世	十三

に囃されながら、何時もひだる、さうな顔色。辻て行き逢ふ時は、土下坐もさせ兼ねまじき町人に、裏門から炭薪の御無心、狩衣着て骨牌の彩色するは、強ち浮世繪の虚事にもあらざりしを、待てば甘露の日和とやら、優曇華の花咲く春は、王政復古の風吹き立て、武家の鼻柱へし折りしより、世は明治の聖代となり、茲に初めて頭を擡げ、むかしは胸に構へるものとのみ覺えし、爵といふもの授けられてより、家祿に代る世襲財産、どうやら華族の華族らしき身とは成りしが、かくても尙誇るまじきものよ、其勝手口をさしのぞけば、處々に錦の裏見えて、今も堂上華族に富めるは稀なり。

吾京に在ると二年、之ぞと云ふ事も仕出來さず。取り出て、語ら

ん程の事も知らねど、茲に只一つ、位ありて産なく、虚禮を知て世智に敏からね、此の不幸なる一種族に就きて、いとも憐れむ可き話柄を持てり。

一 昨年の秋、—— されば十一月の中旬の事なり。吾一日の閑を得て、紅葉を名にし負ふ高雄に眺めぬ。

まづ車を梅が畑に停めて、此處よりは筈を力に、行くと十町ばかり、錦の中の溪を越えて、斜めに攀づる石徑一筋、神護寺の山門近く進みける折、端なく一群の男女に行き逢へり。紅葉の名所なる此處に、紅葉の見頃なる今日來りて、種々の人に行逢はむと、元より珍らしくもあらねば、大方は心にも留めず。されど此一群のみは、

遂に軽々には見過し得ざりき。

先に立てるは年頃四十五六にやあらん。眉秀て眼涼しく、神田祭の山車に見たる、頼朝の人形の面の、や、煤びたらん様なる容貌。褐色の山高帽子に、似寄たる色の二重外套の下より、市樂かと覺しき微塵縮の裾二寸計り見せ、高さ桐柁の下駄に、太やかなる白草のつきたるを穿き、手には藤のステッキを杖きたり。それと雁行に來たれるは從者にや。黒き色もはや褪めたる、低山の帽子をや、臈下に冠り、鐵色の絹袖の羽織に、嘉平治の袴穿きたるが、これは又人品無下に卑くて、左なさだに高からぬ鼻の、而も半ば曲みたるもあぞまし。さてそれより三步ばかり後れて、此處には女三人、肉太

りて色なま白く、此土地にてはおさへと呼ぶ、垂下地様の髪結ひたる、五十前後の老女と、丈低く頬骨高く、されど憎氣は微塵も無き、十八九の侍婢とに護られて、是ぞ吾眼を惹きし本尊なる、年若き嬢一人あり。先なる男の血統と見えて、眉目の邊酷しく似たるが、口元のさりゝとしたるに、鼻筋の飽くまでも通れる、名匠の彫りし阿彌陀佛に似て、一種の威嚴を備へながら、中に得ならぬ愛敬を含めり。膚は雪の只白さのみにあらで、底に紅を包める様、さながら春の曙に、遠山の櫻を見たらんが如し。肉はやゝ乏しけれど、鳥の羽をも欺くべき高島田、繪にもかく形好きはあるまじ。鶯茶色のうね縞の華紋織に、藤紫の變り裏ふつくりとつけ、まだ吹綿も出ぬ黒縮

緬の羽織に、紋は四目菱をつけたるが、長き歩行に寒氣を忘れてや、薄玉子色のシヨールを老女にあづけ、左の手に襦を軽くとりたるが、右手を侍婢に取らせて、一心に足下の石壇のみ見つめつゝ、海老色天鵝絨の着きたる、高き塗下駄を運びくるさま、むかし此寺の開山が、菩提の門と仰ぎけん、かの袈裟といへる女の事など、坐るに思ひ合はされて、今は楓林の眺望も餘所に、吾知らず歩行を止めて、しばし其後影を見おくる折から、わが肩を摺りて、又降り來る者あり。驚きて瞳を移せば、是は其供と覺しく、艶毛の新しき膝掛、左の肩にかつぎ、右の手に四角なる風呂敷包持たる車夫一人。——行き違ひざまに其背を見れば、平假名にふとぞ縫ひける。

ふ、ふの字。——人品より風俗を見るに、誰が目にも彼は華族なるべし。さるにてもふの字、ふぢ井、ふぢ田、さる平凡なる名にもあらず。さては藤原か、そはあまりに上代めきたり。今京にふの字のつく華族、さて思ひ出せぬぞ恨なる。かく思ひつゝ、やがて地藏院に至り、只ある床机に腰うちかけて、名物の焼鳥など命じ、四方の景色を眺むるに、人ならば今を十二分の酔心地、燃ゆるが如き木の紅葉は、峯吹く嵐に誘はれて、未や清瀧川の錦なるらん。鴨は彼方の谷間に啼きて、丁この聲は前面の杉林に聞ゆ。流石に飽かぬ眺望なれど、何故か今は目に染まず、只先に見し嬢の顔のみ、瞳のそゝぐ方に現はれて、苦しとも樂しとも

分たず、胸頭むづ痒く覚え、吾にもあらず恍惚とせるを、退屈して
やと思ひ僻めけん、先にも二度まで断わりたる畑の塙の、又頭なる
荷を卸して、斑剝けたる齒をむき出し、搔餅召さずやと云ふが五月
蠅さに、此處もよき程に切りあげて、再び元來し路を、——もし追
付くともや……

未だ日高ければ、横尾も梶尾も、あれより見にゆきしなるべしと、
横尾に廻りて、會はず、梶尾に行きて、見えす。さては直ちに歸り
しか、しなしたりと、心漸く急かれて、それよりは足も速め、以前
の梅が畑に出て、待たせる車に打ち乗り、何故とも無く只道を急
がせしに、やゝ六七町も來たりて、彼方に一列の車の、同じ方向に

むかへるを認めつ。先なるは褐色の帽子、次なるは玉子色のシヨ
ル、第三番目に老女と侍婢と乗りて、最後に例の低山の帽子見ゆ。
さては以前の一行なりけり。

まづは追付きつと、心俄かに時めきしものから、さて何の爲めに
かく嬉しきやと、自ら尋ねて自ら答ふるに苦しく、さりとは吾も恐
者よと、果はその近よるが恥かしく思はるゝ頃、吾が車夫はやがて
其後に續き、此方の笠の、先なる母衣と、摺れ合ふまで進みて、後
は緩急其度に習ひぬ。

時々吹き來たる風は、得ならぬ香を齎らせて、わが鼻神經を翫り
つ。……あはれ一度見返りたまへ！

路は漸く京近くなり、双が岡を右に、御室の門前を過ぎて、妙心寺の邊より市街に入りぬ。

序なれば住所も知りたしとまで、好な心の進みたる吾。其車の止まらん處を、見逃がすまじと心してありけるに、をしや二條の室町に來たりて、吾はまだ西へ走るに、彼は南へと曲りぬ。——辻に立てる郵便函の、吾を嘲り顔なるぞ憎き。

宿に歸れば、主人は未だ公より歸らず、内儀のみ下女を敵子に裁縫してあり。

内儀は以前さる宮方に事へて、いとも氣のさばけたる人なれば、未だ同居の日は淺けれど、吾は隔意なく語らふなり。

吾はさも心地好げに、今日は誠によき保養してけりといへば、内儀はさも得意氣に、なにと高尾の紅葉は東京にもあるまじ杯、二言目には例の京自慢なり。吾は頭を振りて、吾は其紅葉をいふにあらず、外に花よりも紅葉よりも、なほよき物を見て來しなり。さては美人をや見給ひたる。例も紅葉の頃には、嫖客にすがりて遊山に出づる、歌妓共の多ければ、さる事もあるべしと云ふに、吾は尙打消し、いや／＼さる汚はしき者にはあらず。これは高尚き華族様なり。お姫様なり、令嬢なり。さても京に美人のありてふ事、今日まては只噂計とのみ思ひしが、今日と云ふ今日、其噂の偽ならぬを知りて、江戸ツ子の負けぬ魂も、今は彼の様に奪はれたり。と少しは

嵩を増して云へば、内儀は高らかにホ、と笑ひて、さればこそ云はぬ事か。ひかしより名物の京人形、箱に入りたるに別製はあり。さて其華族は何處の誰様？さればよ、頭文字はふの字にて、家は室町より西、二條より下なるべし。とばかりは知れたれど、他は知り得ぬぞ恨なる。と云ふ間に、内儀は脱ぎ棄てしわが衣を取りて、徐に盪みかけしが、これを皆まで聞かず、忽ち膝頭をはたと打ちて、そは問はても知るさ、藤代家の姫様なるべし。なに藤代家とや。さては宗門保険會社の頭取、子爵藤代榮房の君が、秘藏の姫にてありけるよ。さるにても藤代の名は、昨日も今日も新聞の廣告にて、漸く吾が目にも馴れたる名なるを、先には何とて思ひ出でざりけん。と眩

けば、内儀は更に語を次ぎて、さるにても君の目の高さよ、彼の君ならば華族の姫達の中にも、御容貌と云ひ御氣質と云ひ、並ぶ者もなしとの評判。琴は生田流の奥まで取りて、學問は東京の華族女學校を、去年の春卒業仕たまひぬ。御年齢は未だ十九なれど、少う見ゆるが御容貌の徳なり。して御名は何とか云ふ。美代子と呼ばせ給へり。御總領か末の子か。上に房麿様とて、二十四五の兄君在せど、何時の程よりか良からぬ遊蕩を覺えて、家にもあまり寄りつき給はずと聞く。されど彼の美代子の君のみは、父君にも母君にも、いと優しう事へ給へば、御兩親の寵愛もいと深かり。と語り出づるに、吾は只耳を傾けて黙し居るを、内儀は何とや推しけん、かほどに何

も彼も揃ひたる君の、只惜しき事には……と云ひさしてクス／＼と笑ふに、吾は心元なく、只惜しき事とは……さては啞か吃か。勿體無い、その様な不具にはあらず。もしや例の可忌な病か。さるいまはしき事にもあらず。さらば何として？——惜しい事には許嫁て居りまする。

元より先方は高根の花なり。極まりたりとて極まらねばとて、吾が兎角ういふべき處にあらねど、斯程の名玉、手に入る、果報者の顔が見度し。名なりと聞きたし。御存じならば序に聞かせて！と膝を進むるに、内儀もをかしがり、ホ、と洩る、笑を手の甲にうけながら、されば其婿君は、御同族の杉波家の若殿、直臣殿とか聞きま

したと云ふに、吾は皆まで聞かず。なに杉波の直臣とや。さては名も知れり、顔も知れり。而も十五より十八の年まで、共に學習院にありける友、彼の杉波直臣こそ、其の果報者にてありけるなれ。——吾は流石に呆れて、暫時は言葉も得出ざりき。

さて杉波直臣と云へるは、父を直人と呼びて、子爵家の長男なり。幼少より其質活潑にして、學力も衆に秀でたれば、自づと同窓の群に推されて、躰操に兵式を用ゆる様に成りし後は、彼は常に下士官を務めぬ。あはれ帝國の干城たらんとは、彼が年來の心願なりしかば、彼は十八歳の時學習院を辭し、海軍兵學校に在る事三年、業を卒つて形の如く少尉候補生と成り、常備艦隊中にも一二を争へ

る、某艦の乗組を命ぜられて、遠洋航海にと出てしは、一年ほど前の夏なりき。

吾と別れしは、其兵學校に入るとて、東京を發せし時にして、その後三四回は音信したれど、吾はやがて諸國漫遊に出て、彼は學事に取りまぎれて、後は心ならずも無沙汰しつ。

さるに今ゆくりなくも、かゝる事を聞きたるわが心は、果していかんありけん。——やゝもすればかゝる折に、わが見出したる寶をば、人に拾はれたらん心地して、妬ましくも心憎くも思ふが凡夫の常なり。されど吾れにはさる心の露ばかりも起らず、かへりて何となく嬉しきやうなる感の、胸の片隅にうごめきぬ。

直臣は實に男らしき男なりき。眞竹を割りたらんやうなる其心は、天もその鑄型に生み落しけんと覺ゆるまで、頗る軍人の職に適ひて、疑ひもなく一個の美丈夫なれば、今そをウエニスウエニスの神の托兒とも云ふべき、美代子が夫とし見んに、彼を青鸞せいろうに比すれば、此は丹鳳たんほうに較ぶべく、伉儷相得て、風月恙無ふうげつじやうむからんには、誰か仙家の逍遙せうぎやうのみ羨まんと、思へば思ふほど、更に其樂しさを増すなる。

其夜の事なりき。吾は遂に夢に見ぬ。金光まばゆき軍服を着たる直臣は、例の美代子に晝間見たと等しき衣着せて、共に手を携へ、只在る庭園を散步するなり。吾は廣やかなる石壇を攀ちて、其前に進み寄るに、直臣まづ笑傾けて、やよ巽ぬし、久しく會はざりしと

云ふに、嬢も同じく莞爾やかに、何かと物云ひかくるが、其聲玉を
轉ばす如く、人の心に春を傳へぬ。されど吾は、夢心にも妬ましと
は見ず、心只飽くまでも樂しく、飽くまでも嬉しく覺えぬ。——わ
が畫の思ふがまゝに描き得しを見るが如く、最負の俳優の舞臺に在
るを見るが如く。

其年も暮れ、翌年の正月の二日、吾は兼て俳諧の師とし頼める、
花本某が家に年始に赴き、表座敷に通されて師に會ひしに、やがて
屠蘇出て重組出て、獻酬形の如く了りて、談や、佳境に入らんとす
る時、取次の門生來たりて、慇懃に藤代様が……と云ふ。師は點
頭きて、此方へ。門生はやがて引返しつ。

藤代様？さても床しき名と思へば、我が胸は、や躍りてある處に、
次の間より衣音聞えて、やがて入り來たりしは、殿にもあらず、嬢
にもあらず、去年高尾にて逢ひたる、彼の一行の中には見えざりし、
七十路餘りの老翁なり。栗皮色の鹽瀬の被布に、茶の羽二重の小袖
を重ね、左の手に煤竹骨の太き扇を持ちたるが、骨組逞しくて腰だ
に曲まず。白き髪を後へなてつけ、髯は鼻の下のみ剃りて、耳の根
より腮の邊まで、雪の如きを一寸ばかりに伸ばし、顔の色はやゝ紅
色を帯べるに、目鼻自づと雅びて、而かも故意ならぬ威嚴の備はれ
る、何處やら彼の嬢にも似たる様に覺ゆるに、さては其の祖父にも
やと、心私かに推し量るを、其の人はいと大様に一禮して、やがて

わが上座に着きぬ。

師は件の翁に向ひて、年頭の挨拶より、やがて俳諧の話などするに、此翁思ひの外氣軽く、まだ名乗りもあへぬ吾が顔を顧みて、時には話の緒を投げ掛けんとす。

師はそれと見て、やがて翁にひかひ、こは巽碧瀾とて、此頃東京より来たれる青年畫工なりと、紹介せ。又吾には、これこそ藤代家の老公、如松の君にて在はせ。と云ふ。さては案に違はず、いよくかの君の祖父なりけるよ。

かく紹介されて、吾は嬉しう覺えたるに、老公も新しき友を得たる事の、いとも楽しくや思ひけん、それよりは更に打解けて、種々

の話など仕掛け、やがて歸去際に、ちとわが家にも遊びに来給へ、何は無くとも當座などして慰まんと云ふ。まことに面白げなる老翁なり。されど後に師の噂を聞けば、あれにて中々氣むづかしき處もありとぞ。

其二月の初旬なりき。柳馬場の能樂堂に、月並の催會ありけり。

吾は誘ふ人のありて、共に見物に行きしに、不圖見れば、脇正面の一段高き棧敷に、藤代の老公も来て居たり。さて其傍を見れば、日外高尾にて會ひたる子爵の君も居たり。其折の老女も居たり。又例の曲鼻の従者も居たり。されど彼の嬢のみは見えず。

花の本の俳席にて、已に二三度も會ひし事ある老公なれば、挨拶

せては無禮なるべしと思ひ、機會を見て其の棧敷を訪づれしに、老
公は太く喜び、いざ此方へと招ずるに、止むを得ず會釋してにち
り入り、初めて子爵にも挨拶すれば、子爵も此方を捻ぢ向きて、さ
ては碧瀾ぬしか。君が事は父より聞きつ。など云ひ。はや老女に命
じて、茶を勸め、菓子を取らせ、さては蒔繪の重組を開きて、其中
にありし鱧と巻玉子を、少やかなる木皿に盛りて、わが前に列べさ
せ、有合ふ盃を取りて、まづ一獻と吾に差す。此時仔細に其態度を
見るに、是も何うやら交際好きとは思はるれど、老公の如き大様な
る點はあらで、其言葉遣の急き込みたる様に聞ゆると、咳とも付か
ず、暖とも付かず、折々鼻をクンクンと鳴らす、其の癖なりと云

ふ事も知りつ。——無遠慮に云へば、餘り思慮ある人とも見えざり
き。
吾が藤代家に入出入するやうに成りしは、實に彼の花本の俳席と、
此の能樂堂の觀能とが、其媒介と成りけるなり。
氣輕なる老公と、交際好なる子爵とが、頻りに來遊を勸めけるま
ゝに、吾も頗る力を得て、其後折々西洞院の邸を訪づるに、豫想
し程の窮屈も覺えず。やがて吾は、老公の俳諧の友なる如く、子爵
には圍碁の敵と成りぬ。されど彼の美代子嬢とは、其の爪音は折々
聞きながら、未だ抄々しく言葉もかはさず、又夫人にも子息にも、
面を對すべき暇は無かりき。そは夫人の病身に、而も人に會ふを

好まぬ質なればなる事、後には自ら點頭かれつ。
尙一つ心付きたるは、かく邸宅を見事に構へて、門に正四位子爵
何某と表札打ち、主人は保險會社の頭取を務め、さては貴族院の一
席を得たるにも似ず、訪ひ來る人に同族らしき貴顯は稀に、却つて
世には名も知れざる、されど行装のみは紳士めきたる男、又時とし
て辯護士牀の者の、屢々川あり氣に出入る事なりき。その何の故な
るを知らず。

去る程に、春もはや彌生近くなりぬ。吾は年來の心願なれば、近
畿漫遊の途に上れり。出發の前一日、吾は告別にとて訪づれしに、
老公も子爵も、口を揃へて吾が此度の發企を賛し、常にも優りて款

待したる末、赤銅に金銀の象眼したる矢立を、餞別にとて贈りぬ。
此日も嬢は母君の傍にありと覺しく、遂に面を見せざりき。
かくて京を出てしは、四月三日、神武天皇祭の當日なりき。態と
汽車には乗らず、蹴上、逢坂山を越えて大津に出て、其處より便船
して、唐崎、堅田、竹生島にも詣で、彦根の樂々園に二日計り滞ま
りて、需むる人に書き與へつ。それより汽車路を伊勢に入りて、内
外の宮は云ふも更なり、乳母の懷にありける頃より、はや其名に憶
がれたる、二見の浦の眞景をもうつし。それより伊賀に迂回りて、
上野の城下には芭蕉が故郷塚を掃ひ、月の瀬に残る香を漁りて、笠
置の山の奇石に驚き、木津の河流を下りて、奈良の京に筥を停むる

と七日計。名ある寺々、大方の参考品をも寫して、法隆寺にも立寄り、三輪、初瀬、多武峰、序なれば葛城山にも登り、吉野の奥は千本まで眺め、紀州には高野、和歌の浦、那智の瀧をも觀て、船路を琴平まで渡り。歸途には須磨明石の海水を浴びて、大阪の知音に遮らるゝ事又十日あまり、漸うにして汽車を七條に乗り棄てしは、京の春も何時しか過ぎて、今は都踊の噺も残らず、叡山の巔草緑に染りて、人は袷の裾輕げなる頃なりき。

實に此間六十日餘り、元より一人旅の徒然なればや、想は屢々それに通ひて、臙氣ながらも夢の中に、美代子を見ると七度、直臣に會ふ事三度。或時は孤燈の邊に筆を甜りて、兩人を一葉の小舟に乗

せ、櫂は羽根のつきたる可愛らしき童に取らせて、琵琶の湖に泛べんと企て、或時は客窓の下に紙を述べて、兩人を花の樹の下に立たせ、之に神鹿を戯れしめんと試みつ。さて一度も書き成らざりき。

宿に歸りて、其夜は宵寝に草臥を休め、次の日寫生帳と印ばかりの土産物持ちて、西洞院の邸を訪づれしに、思ひさや扉ははたと締められて、見慣れたる表札はあらず。こはそも何事と、車夫をして程近き酒屋に尋ねしむれば、藤代様には仔細ありて、先月の末御移轉ありしと答ふ。其移轉たる先はと問へば、たしか大宮の一條邊といふ。

左らば其處へと、車を大宮の一條まで曳かせて、此邊に子爵の邸

らしきはと探がすに、それらしき門も見えず。尋ねあぐみて又最寄の派出所に問へば、それは此の四五軒前、黒き長屋門の中といふに、又其處へ行き、先刻は何氣無く通り過ぎし、圓妙寺といふ寺の門をよく見れば、成る程その小門の方に、小さく只藤代と貼たり。さては此中よと黙頭さて、その儘門を入れば、三筋の石壘を敷きつめ正面は本堂と覺しく、右へ行けば厨にて、其間に小やかなる玄關あり。まづ此處より訪づれんと、敷臺近く進みて頼むといへば、どうれと應へてや、少時したる後、中より赤柄顔の太りたる女、頭を圓くして、白木綿の袷に、鼠の腰法衣着けたるが出ぬ。さては尼寺なりけり。

吾はまづ慇懃に、藤代様は此方かと問へば、尼は下げたる頭を半ば擡げて、額越しにわが貌を見上げつゝ、はいと云ふ返事も覺束無げなり。吾は重ねて、御主人は御在宿にやといへば、まだ何れとも答へず。却りて貴君は何誰と尋ぬるに、吾は名刺を出だし、昨日旅より歸りたれば、態と今日訪づれ参らせしなり。と來意を陳ぶれば、尼は名刺を受取り、されば暫く待たまへ。と其儘奥の方へ走り入りぬ。

さるにても訝かしき事のみ見るものかなと、吾は心元なく四邊を見廻はし居る處へ、以前の尼此度は厨の口より出て來たりて、さらば此方へと先に立つに、吾は其後に尾さして、厨の傍より板扉に沿ひ、

行くど七八間、厚き生垣の中程なる、狭き枝折戸を入れれば、中はや
、廣き庭に成りて、芝を植ゑたる築山、小石を敷きたる空池、掃除
飽くまでも行き届きて、塵一筋だに止めず。雪見形の苔蒸したる燈
籠の邊には、毬形に刈り込みたる檜幾株もあり、今は實もや、肥え
たる、枝垂梅の太きが立てる陰より、短冊式の石橋ありて、それよ
りは鞍馬石の飛石六つ七つ、彼方はまはり椽の、廣やかなる座敷二
室計り見えたり。

只見れば正面の障子左右に明け放ちて、主人の子爵は其處より身
を伸ばし、巽君かよくこそ來給ひたれ。いざ此處へと、手づから褌
を出して、吾が爲に席を設くるに、吾は會釋して此處に坐を占むれ

ば、やがて次の間より、例のおさへの老女、茶を運び出て、吾に禮
す。此時彼方の襖を透して、人の苦しげに咳する聲聞え、ついて若
き女の聲音にて、何やら語り居る氣勢しぬ。さては其處に病夫人の
在して、例の嬢も傍に看護すると覺し。

席漸く定まりたれば、吾は旅行中の物語など始むる前に、老公は
御留守にやと問へば、父は仔細ありて黒谷の某院にありと云ふ。そ
れにつけても以前の邸を棄てし、如何なればかゝる處へ移り玉ひた
ると、吾は何氣なく尋ねしが、子爵は何故にや、人もあらぬ庭の方
を打見やりつし、さればよ、妻の病氣の思はしからねば、醫者の勸
むるまゝに、此處には移り來つ。と濫り勝ちに答ふる様子、如何

にも覺束無くて、他に深き仔細のあるらしく覺え、果は氣の毒なる心地して、其まゝ旅中の噫に移りぬ。

かくて一時間計り語らふ中、子爵は勉めて心地好げに持成せども、忍ぶ苦慮の色に出で、何處やら優れぬ容態の見ゆるに、今日ばかりは吾も何となく居心悪しく、やがて暇を告げて退りしが、途すがら考ふれば考ふるほど、腑に落ちぬ藤代家が此の有様。不審の雲は忽ちわが面を掩ひて、自づと眉も顰む様覺えし。

されども一まづ宿に歸りて、例の内儀に尋ねなば、少しは其仔細も知らるべしと、さては途を急ぎて宿に歸り、内儀に今日の次第を語りて、いぶかしき節々を云へば、内儀は數度太息を洩らして、さ

ては人の噫も眞實なりけるよ。と呟く。なに人の噫？吾は久しく旅路にありて、それすら更に聞かぬものを、疾く語りてよと急ぎ立つれば、内儀は膝を進ませ、實に君は知りたまはじ。妾も君に語らんとは思ひしかど、昨夜も今朝も事に紛れて、云ひ出でん暇の無かりしなり。さては彼の藤代家が、さる有様に成りけるも、基を問へば神ならぬ身の、只世の表のみを知りて、裏を知りたまはぬ子爵が過失なり。されば彼の保險會社を、去年の秋より興し給ひしも、畢竟投機師共の餌に成り給ひしにて、其監查役理事などに、心の直ならぬ者あるを、子爵は露ばかりも悟り給はず。只其の爲すがまゝに委せありしが、此程其曲者共の、道ならぬ榮華を食らん爲め、株券の

偽造なしたる事共、漸く公の目に止りて、重役といふ重役三四人は、残らず天の網に掛けられ、今も尚堀川の監獄署にありとぞ。其折かの藤代様も、事に座したる嫌疑受けて、共に櫻め捕らるべかりしを、知り合へる人が辯護にて、辛く其罪は免かれしかど、其爲めにさしも望有りける會社は、瓦の如くに打碎かれ、藤代様の信用といふもの、一時に京の地を拂ひて、西洞院の御邸も、やがて他手に奪はれ給ひぬと、これまでは仄かに聞きしが、さては悪事千里の喻にもれず、其噂の通りにて、藤代様は御邸を棄て、譜代の老女が姉なる人の、住職を務め居ると聞きし、彼圓妙寺には忍び給ふか。さるにてもあれほど時めきたまひし君の、僅か五十日經つか經たぬに、左

る浅ましき姿と成り給ひたる、心の中や如何なるらん。お氣の毒と云ふも思やと、語り了りて又嘆息す。
吾は之を聞き、さてこそと思ひ當るに、いと胸苦しきの増して、やがて午餉の膳に對ひしが、もはや飯も通らず、其まゝ茶にして箸を擲ち、さるにても榮枯の理は、かくまでに速なるものかと、柱に凭れて腕を組みしが、未だ老公に會はぬ中は、何と無く心の濟まぬ處ありて、其まゝ又車を命じ、先に聞きたる黒谷の眞行院に、例の如松老公を訪へば、老公は奥まりたる一間を拂はせて、何時の間にもやら飾を落し、是も佗しき借住居なり。
されど息の子爵には似ず、快活なる其質は失はて、わが旅中の物

語など、次々に尋ねらるゝに、吾も興に乗じて、彼是語り出でたる後、先刻圓妙寺を尋ねたる事より、世の噂などほのめかして、やゝ慰諭顔に語れば、老公はさも無造作に、それもこれも皆榮房が白痴故なりと、後は他を顧みて云はず。吾も取りつく島を失うて、果は又俳話に成りぬ。

花咲けば車馬市を作し、花散て門前雀羅を張るとや云ひけん。權門に阿り、喪家を顧みざる、是を末世の人情なる。されども吾にはさる事無し。わが藤代家に入せしは、其の富を慕ひしにもあらず、其貴に媚ぶるにも非ず。身分にも似氣なく平民主義にて、而も一種の奇骨、自ら凡調を脱せる老公の風の、敬すべく愛すべきと、尙白

地に云へば、彼の嬢の姿も心も美しきに、怪しく情を惹かれたるに依れば、一朝不慮の災厄にかゝりて、かく逆境に立てばとて、何かは之を厭ふべき。寧ろ痛はしさに身を驅られて、此後も間暇ある毎には、大宮へも赴き、黒谷へも行きて、老公が徒然を訪づれ、子爵が數奇を慰めたりき。

或る時吾は京極の常盤座にて、嬢が兄なる房麿を見たり。高尙さは父子爵に似て、妹君の愛敬も備へつ。さまで弱しとも見えぬ目に、細き金縁の眼鏡を掛け、山の低く窪みて、鏝の飽くまで狭き帽子に、華美なる巾の巻きつけたるを冠り。時候は夏なりしかば、薄色の絹チルの單衣着て、メシヤムの煙管咬はへ、同じ年輩なる友二人計り

と、藝表の棧敷買ひ切れるが、時々其處へ侵入せる、怪しき振袖の女性を捕へては、笑ひさどめくなど、家事を惱める氣色は、さて兎毫ほども見えず。

さて又直臣は如何にしてあるらん。此春遠洋航海より歸りしと聞きしが、住所定かならぬに、仕たき音便も爲し敢へず、心ならぬ日を送る中、間もなく日清の戦端開けて、畏くも主上は、大森を廣島まで進めさせたまひ、今日は二師團の出發しぬ、明日は豫備兵も召されんなど、辻に待つ車夫も、此の噂に晝寐を忘るゝ頃、直臣は候補生の籍を出て、海軍少尉に任ぜられたる事、新聞の一面に見えつ。——恐らくは已に戦地にや赴きけん。更に音便の道は断えたり。

かくて其冬の初旬なりき、一日吾は彼の尼寺に子爵を訪ひしに、子爵はやゝ風邪心地とて、居間の片隅に夜具延べさせ、優れぬ顔色にて打ち臥しぬ。

只見れば其夜具は、吾等が常に用ゆるものに勝らず、紫金巾の板締の、今は半ば褪せたるに、是も新からぬ綿郡内を重ね、枕紙も大分脂染みて、下に敷きたる白き金巾も、處々に汚點着き、四邊を建て切りたる故にや、熱氣の臭さへ鼻を撲つ。——是れぞ貴族院議員正四位子爵藤代榮房が病床なりける。

吾は進みよりて、いかにや仕給ひたるといへば、子爵は三分ほど伸びたる髯の、頬より頤の邊まで埋めたるを、手掌にて搔撫てつゝ、

四五日前よりの寒氣に、鈍くもやられたるなり。と云ひつゝ、起き直り、痰一ツ吐きたる末、何くれと語り出してしが、やゝありて子爵は言葉を改め、巽君、吾は君が弱冠に似ず、煩る義氣に富みて、心の底に一片の誠實あるを見込みて、頼みまゐらする一事ありと云ふ。其言葉のいかにも用有り氣なるに、吾は吸ひかけたる煙管をはたきて膝進ませ、何事にもあれわが身にふさはしからば、頼まれ参らすべし、語り給へ。と云へば、子爵は少しく聲を低め、例の鼻を頻りに鳴らしつゝ、見らるゝ如き吾が家の状態、之が原因なる忌はしき物語は、今改めて語らずとも、大方は已に知り給はめ。それにつき君を煩はし度きは、餘事にあらず金策の事なり。吾慮足らず智

淺くて、人の猜智の犠牲と成り、かく淺ましき姿となると、元より自から招きし禍なれば、誰を恨まんやうもあらねど、只打棄て難きは兒等の將來、汚し難きは華族の体面なり。是も一時の吾身ならば、一萬二萬の金融に、胸痛むる事もあらねど、今かく逆境に陥りては、其一割だに金策成り難く、親族といふもの無さにあらねど、何れも吾に似たる腑甲斐無さ。彼より凭れ掛らんとも、是より便らん事思ひもよらず。恥かしながら今は召使の縁を頼みて、かゝる佗しき住居をするなり。元より抵當にすべき財産とてなけれど、乍不肖籍を貴族院に置けば、構へて不徳なる事はせじ。歳費の半額を五ヶ年賦に、千圓ほど借り出だすべき口はあらずや。左もなくしては差し當り、

此の冬の議會にも出て難く、此事自然公に聞えなば、果は家名をも汚すべし、大耻辱と成りもやせん。此處煩る心苦しければ、何ともして君が働きに、わが此危急を救ひたまへと。——是貴族院議員正四位子爵藤代榮房が言葉なりき。

吾は始終を聞き、霎時は只黙然たるのみ。そは其事の承引き難き故にはあらず。吾生れて廿五歳、若きより身を美術界に投じて、構想と運筆とにこそ思を碎け、かゝる六かしげなる依頼を、未だ曾て受けし事あらねば。

さるを子爵は臆したりとや見けん、覺束無げにわが顔を凝視るに、吾も亦其心根の推量られて、今は猶豫もならず、よろし、吾微力世

事に疎けれど、及ばん限りは力を盡さん。願はくは心安かれ。と思はず云ひ放ちて、やがて其大膽なるに、吾ながら驚きぬ。

子爵はやがて手を鳴らして茶の代をよびぬ。其時出でたるは珍らしくも嬢なりき。嬢は吾を見て閑雅に一禮したるが、不圖見れば、無造作にまさたる束髪、他手を借りたりとも覺えず。面の色や、蒼ざめて、さしも涼げなる眼の、少し窪みたるに、此の日頃の心勞も見えて、左の無名指の指輪のみ、淋しげに光を放てり。

吾はあまり立入りて、人の事に興かるを好まず。されど一度依頼を受たる上は、如何にもして爲し遂げんと思ふが癖なり。

されば此日子爵より、吾身に取りては千斤の重荷にも比すべし、

此大事を托されて、早胸は安からず、やがて暇を告げて、家路を急ぐ途すがらも、兎やせん角やと、種々に案じ煩ひしが、元より世事には敏からぬ吾、好き智慧の出づべうもあらず。兎角はかゝる事に慣れたりと見ゆる、宿の主人に謀らんこそよけれど、やうく思ひ定めし時は、廿丁餘りの途何時しか過ぎて、はやわが宿の門近かりき。

見上れば空は一面に曇りて、青き色の少しも見えず。北山風耳朶を掠めて、名物の時雨、今にも雲を漏れんとす。何時にも増して、此夕暮の裏淋しさ！

其夜主人に向ひ、今日子爵より頼まれし事を語りしに、主人は皆

まで聞かずはや眉を顰めて、そは思ひもよらぬ事かな、明日が日も華族の禮遇を停めらるべき藤代子爵、彼の人の名を聞きては、二の足踏まぬ者も無き現今の世に、千圓の金はさて置き、十圓の融通も覺束無し。障らぬ神に祟無しと云ふものを、君も由無き人に關係ひて、自ら災厄をな招きたまひぞ。とさも背無き返答なり。

人の猜智に誑られて、一時産を破りしとは聞けど、さまでに信用の落ちしとも覺えぬに、さりとは主人が言葉の、餘りに酷なりと思ひしかば、戀人を誹られたらん心地して、吾は甚だ面白からず、態と其理由を尋ねれば、主人は吾よりもよく其内幕を知りて、かの人の負債に苦めるは、遠き五六年前よりの事にて、昨日今日に起り

しにはあらず。其原因は、子爵があまりに佛性に於て、人に欺され易きに拘らず、兎角に投機的の事業を好めると、又一つには其息房磨が、兩親の慈愛の深さに甘へて、早くより身を持ち崩したるに依れりと、それさへ委しく語り聞かせぬ。

吾が世故に慣れぬ耳には、初め高雄にて會ひ、次に能樂堂にて會ひ、さて其後屢々邸に出入して、見もし聞きもしたる榮華の裏に、さる負債の山あらんとは、如何にしても信じがたく、尙も抗辯を試みんとせしが、又思ひ返してやみぬ。

されども一端諾ひたる言葉のあれば、此儘に止まんは心ならずと、其後彼の宗匠にも謀り、又さる商人にも語りしに、何れも宿の主人

と同じ様な事云ひて、更に取り合ふ氣色も見えず。さては吾が子爵の爲めに、かくまでに心を碎けるを、或者は諫めつ、或者は怪みつ。

かくて吾は種々に頭を痛めしが、遂に功を奏せざりき。

其後幾も無くして、吾は去難き用事の爲めに、俄かに東京へ歸る事と成りぬ。其折も告別に行きしが、子爵は大阪まで趣きしとて在らず。さて老公を訪へば、此人も今朝より叡山へとて、遂に會ふ事を得ざりき。

冬の中は俗事に取紛れて、霎時は藤代家の事を忘れたり。越えて今年の春の初、思ひがけぬ珍事は、宿の内儀の書狀により

て、太くわが胸を蕪かせぬ。

そは如何なる珍事なりけん？

わが敬愛する藤代美代子、——わが花の如く玉の如き美代子は、大阪なる高利貸の大家、赤鍋某が家に嫁ぎぬ。赤鍋とは人も知る、新平民の頭領なり。

噫、浮世の浪の荒き事よ、可惜夜光の名玉を執て、豚兒の小屋の中に投じぬ。されど藤代榮房が、正四位子爵の光を失はず、貴族院議員の譽を奪はれざりしは、實に其玉の沈みたるが爲めなりき。然り美代子が健氣なる覺悟は、遂に子爵の急を救ひぬ。吾は此珍事を聞きて、三日計りは胸悪しかりき。

知らず彼の杉波直臣は、今や渤海灣の一隅に在りて、そも何をか夢むらん？

(二十八年稿)



二 去つた女

「アラもう六時だよ。何だつて遅いんだらうねエ。」

桐代は柱にもたれて、爪弾で歌澤の何かをさらつて居たが、半分ほどで三味線を押しやつて、おれつた相に髪の後髪を上げながら、彼方の茶箆筒の上にある、置時計を見て斯う呟いた。年は二十三四、意氣な瘦ぎすの女だ。

襖を明けて、次の間から婆やが顔を出す、
「御新造さん！ 御飯は如何致しませう？」

「もう少し待つとくんない！ もう直さお歸りになる筈なんだから。」
「でもお汁が冷めますで御座いますか……」
「仕方が無いや子…… 又後に温めるからいよ。そうして、お前かまはずに食べとしまひ！」
「難有う存じます。」

婆やは行つてしまふ。

入れちがつて庭口から、案内も無く入つて来て、ヌーッと椽側に立つたのは、半月前まで世話に成つて居た、山野音平と云ふ、たしか一度は軍籍に在つた男だ。年の頃四十五六。
「今晚は！」

と、幅のある落付いた聲に、初めてそれと見た桐代は、忽ち顔色を變へて、壁側まで身を除けながら、

「ア、貴君！　まア……何だつて居らしつたんです？……手出しをなさるなら、私……私聲を立てますよ。」

山野はニヤリと笑つて、

「イヤ、何も驚く事は無い。打ちも叩きもせんから、まア其處へ坐るが可い。」

「……」桐代はまだ油断をしない。

「元の座に直らんか！……」

と、云ひかけて氣を更へて、わざと他人行儀に、

「さ、何卒も坐り下下さい！」

仕方が無しに桐代は、氣味悪々元の席の方へ来て、

「全體何の御用です？」

「イヤ別に何の用と云ふても無いが、只お前が何うして居るか、その様子を見に来たのぢや。」

「貴君が？」

「さうぢや。わしが来ては悪かつたかなア？」

「悪いか悪くないか、……御自分に聞いたら解りませう。貴君も暇をやつた女に、もう用は無い筈ぢやありませんか。」

「然しさうは云はれんぞ。随分離縁になつた夫婦で、其後交際しと

る例もある事ぢや。たまに見舞に来る位、決して差支無い筈ぢやが……」

「でも山野さん！貴君こんな所へ入らしつて、若しか會つたら何うなさいますか？」

「會ふとは誰に？」

「誰につて……：貴君……：私今は獨身ぢや御座いませんよ。」

「それは萬々承知の上ぢや。」

「でも、會つたら……」

と、半ば獨語の様に云ふのを、

「會うてもまさか取つて食はれもすまい。」

と、座敷中を見まはして、

「イヤ、暫時來ん中に、大分様子が變つたナ。では此所に同棲してゐるんぢやナ？」

「さうですよ。」わざと強く云ふ。

「それで近所でも許しとるのか。驚いたものぢや。イヤ、然し知らぬが佛ぢや。」

「何ですッて？」

「お前は何も知るまいが、私は大きに心配してやつとるぞ。」

「何をです？」

「彼の男の爲めにぢや。」

『それは大きに憚さまですこと！ ですが御心配にやア及びません。彼の人にも荒神様が付いとりますから。』

『荒神か魔神か知らんが……今にお前はみじめを見せられるぞ。』

可哀さうなものぢや。……お前は何も知らんぢやらうが、今あの男

には、非常な嫌疑が掛つとる。若しそれが公然の沙汰になれば、ひ

いてはお前の身にも及ぶ事ぢや。ぢやから私は心配してやつとる。』

『何ですって、彼の人に非常な嫌疑ですって？ 他聞の悪い事あつ

しやるな！』

『だつて此所には誰も居らんが……』

『壁にだつて耳はあります。』

『そりやア成る程油断は成らんナ。』

と、冷やかに云ふ。桐代はまた山野の顔を、如何にも憎さげに見て居たが、さて腕づくでは追ひ出す事も成らぬので、只腹中で業を煮やして、眉をビリ／＼させて居る。

山野は氣をかへて得意らしく、

『まだお前には話さずに居つたが、日外話のあつた大磯の地面は、とう／＼私を買ふ事にしたよ。』

そんな事は何うても可いと云ふ風に、桐代は空嘯いて居る。

『イヤ、お前が以前の通りなら、是非此冬は一所に行くのぢやが、……家作も可なりのが付いとるし、畑はある、花壇はある、海に

は近し、眺望は好し、夏は涼しくて、冬暖い……。

「結構ですこと！」

云ふ桐代の口邊にも、まさに冷笑の色が動いて居る。

山野は又しばらく黙つて、何か獨り考へて居たが、

「時に彼の男は、たしか保險會社に出とるんぢやつたナ？」

「さうですよ。」

「ぢやが實は見習で、まだ定まつた収入は無い筈ぢや。」

「何だか知りませんが、そんな物ア的にしないで、ちやんと財産はあるんですよ。家作もあります。株も持っています。公債もあれば、貸金もあるんです。何もしないで遊んでたつて、ちやんと食べる丈

の物ア上がるんですよ。」

「へッ、それを信用しとる中が可愛い。」

「何ですって？」

「イヤ、聞えなけりやお前の幸福。」

と、今度は此方で空嘯く。桐代はもう耐へ兼ねた體で、

「さ、もういゝから行つて下ださいな！ 何時まで居たつてろくな

話ア無いんだから。」

「イヤ、今來た計りぢや。まだ歸るにや及ばん。」

「けども……。」

「けれども何ぢや……。」

時計を見ながら、

「もう直き歸つて来るんですから……貴君が居ちやア困るぢやありませんか。」

今度は露骨だ。

山野は濟まして顔を撫てゝ居る。

「さア、行つて下ださい！」

「……」聞えない風。

「さア、行らつしやい！」

「……」平氣な顔。

「これほど云ても行らしやらなきやア、私大きな聲を出しますよ。」

「出すなら出せぢやが、……コレ桐代！」

山野は漸くねぢ向いた。

「何です？」

「お前が往來へ引ずり出す迄、私は此所を動かんよ。」

桐代は少し折れて、頼む様に、

「ぢやア後生ですから、行つて頂戴！」

「いやだ。」山野はわざと強く頭を振る。

「だつて私、もう恐闘々々しちや居られないワ。彼の人が歸ると悪いんですから。」

「ぢやア私が此所に居ると、又變に思はれると云ふのか。」

桐代は苦り切つた顔をする。
山野は直ぐと思ひ返へして、

「イヤ、これは悪かつた。とんだ自惚を云つたものぢや。馬鹿ぢや、
愚ぢや、これは取消す〜！」

と、極り悪さうに少し坐を移して、

「ぢやが桐代！ 全體私はお前に會うて、少し話し度い事があつて
來たんぢや。何もお前の厭がるものを、無理に居つて慰みにするの
ぢや無い。只一言、お前に話し度い事があつて來たんぢや。——實は
彼の時話すべきぢやつたが、其頃はまだ判然しとらなかつたから、
お前にも云ふ勇氣が無かつたのぢやが……」

「何を一體云つてらつしやるんです。云ふ事があるなら早く仰有
いな！ 男らしく〜！」

「全體桐代！ お前今の身に成つて、それで幸福と思ふか何うぢや
？」

「ホ、ハ、ハ、まるで白洲へ出てる様ねエ。」

「さうぢや。一應は尋問せんぢや成らん。何うかな？ 桐代！」

「それは幸福だと思ひますとも、私こんな嬉しい事ありませんワ。
暢々して、清々して……」

「さうか……」

と、女の顔をぢつと見入りながら、

「それぢや今まで私の側に居つたのは、非常な苦痛であつたのぢやナ？」

「さうですとも！」

女は捨鉢の氣味で答へる。

「苦痛は苦痛であつたか知らんが、私はまたお前を、そんなに虐待しとつたらうか？ ッン？」

女も流石に、

「虐待？……そんな事ありませんけども……」

「それともお前に心配でも掛けたか？」

「いゝえ……」

「ぢやア全體何うぢやつたらう？」

「ほんとに貴君はよく仕て下下さいましたサ。そりやア私だつて忘れやしません。」

「さうか？」

と、少し考へて、

「それに又お前は、何故あんな事を仕出來したのぢや？」

「あの事ですか？……」

と、少し顔を反向け、

「だつてそりやア斯うなんですもの。」

「斯うとは何うか？」

「彼の人が可愛いんですもの。」

「そして私は？」

「貴君？……私何とも思つちや居ません……」

「私にやア愛が無かつたと云ふのぢやナ？」

「はい！」思ひ切つた返事だ。

「さうか？ それでは聞くが、お前は私に愛が無かつたのなら、何故又私の所へ來たか？」

「何故ですッて？」

と、額越しに山野の顔を見て、少し氣色ばみながら、

「たかゞ十六や十七で、好きも嫌ひもあつたもんですか。阿父さん

や阿母さんが、何でも貴君の云ふ事聞けつてえから私は云ひなり次第に成つてたんです。私アまだその時分にやア、親の云ふ事アどんな事でも、聞かなさや成らないと思つてましたから……今なら誰かが……」

「さうか！」と強く點頭いて、『それぢやアお前は私計りて無く、自分自身も欺いたんぢやナ？』

「何だか知りませんが、私やア子供だつたんですもの、何だか覺えて居るもんですか。」

「さうか。」

と、山野は少し勃然とした體で、ちつと相手を見詰めた。

「そんなら何か、今ぢやア眞に解つたと云ふのか？」
「何がです？」

「戀が！」

「戀？ エ、解りましたも、此年に成つて初めて解りました。」

「あの男には惚れたと云ふんぢやな？」

「さうです。」

「然し桐代！ その解つたと思つたのが、まだ眞正の戀ぢや無いかも知れんな。今お前は二人目の男に會うて、初めて戀を知つたと云ふが、その中に三人目の男が出来たら、又何う成るか知れんなア。」
「憚さまですよ。私やアもう彼のの人とは、一生變るもんですか、エ

、二世までも云ひ交はしたんですもの。」と、又自棄に云ふ。
山野は冷な笑を浮べて、

「イヤ、大きな事は云ふまい。今に後悔する時が來やうぞ。」

「どんなに成つたつて、貴君のお世話に成るんぢやありません。」

「ウン、それほどお前は惚れとるか？」

「ホ、惚れたから仕方ありません。先方だつて然うなんです。」

「それほど先方でも惚れとるなら、何故また彼の男から公然結婚を申込まんのぢや。公然私に申込んで、桐代は我が愛する女ぢやから、妻に申受け度いとさへ云へば、私も男ぢや。ては喜んで……」
「何うだか！」小聲でませ返へす。

「……喜んで承諾して、お前にも相應な支度をしてやつて、彼の男と一所にしてやらん事も無い。それに内證で、私の目を盗んで……何故あんな不體裁をしたのぢや？」

「……」

「何故か？」

女はまだ黙つて居る。

「それは云へまい。私が代りに云ふてやらう。その公然申込まんのが、即ち彼の男の輕薄な所ぢや。」

女は恨めしさうに睨んで居る。

「公然結婚するのには、種々の故障があるからで、その故障を排し

てまでもと云ふ實意は、生憎彼の男にやア無いのぢや。」

「何とても仰有い！……今更そんな水をさしたつて、出來たものが斷れるんぢやありませんから。」

「無論強いて斷れとは云はん。然し桐代！よく聞けい！」

「ハイ、聞いてます。」

「私も縁あつて、お前を十七の時から世話をして、今年で足掛七年……今日已に斯う成つて見れば、もはや關係は無いのぢやが……」

……然しどうも私の方では、まだ他人とは思へんのぢや。」

と、少しにぢり寄る。女は又それ丈坐を除ける。山野はますます眞顔だ。

「年齢も親子ほど差うとるから、元よりお前に惚れて貰はうとは思はん。然し私の方からは、——まさかに娘とも思はれんが、妹位には思うとるから、以前の關係は無いにしても、お前の將來は案じずには居られん。」

「それは難有う御座いますねエ。」と、空々しい。

「それで桐代！」と、此方は段々眞顔に、「全體是から、お前は何うする心算なのぢや？」

「何うするつて貴君……もう貴君の御世話になるんぢやありませんから、貴君は黙つて見て居て下ださりや可いんです！」

「不ヤ、それが黙つて見ては居られん。見すくお前が……兎も

角も七年間、自分の有にして居つた女が、現在不幸に陥うと云ふのを、私は黙つて見ちやア居れん。」

女は少し眼を見張つて、

「現在不幸につて……？そりやア餘計な御心配ですよ。よしんば私が、明日が日にものたれ死をして、犬や鳥の餌食に成つたつて、それこそ貴君は、態を見ろ！好い氣味だつて、高身で見物して居らつしやりやアい、ぢやありませんか。何うせ私の様な不貞腐は、今に罰が當らずにや居ません。」

キツバリ云つて、團扇を劇しく使ひ初める。男は呆れた様にそれを凝視する。

「コレ！ お前は何時の間にもそんな女に成つた。今云ふた言葉は何ぢや？ 自暴自棄極まる言ぢや……そんな阿婆摺のお前では無かつたに……あゝ男が男ぢやと、女までもさう墮落するのにか！」

「何ですッて？」

と、女の眼は更に輝く。

「お前は實に氣の毒なものぢや、戀は盲ぢやと云ふ事があるが、成る程お前は、全く戀しとると見えるな。」

「だから先刻も云つたぢやありませんか。ハイ、私は全く戀しとりますよ。——何だかむづかしい言葉だぞ。ホ、ハ、！」

「然し桐代！ それぢやアお前は、いよゝ彼の吉里と、終生苦樂

を共にする氣ぢやナ？」

「何だか私にやア、そんなむづかしい事ア解りません。」

「吉里と夫婦になる心算かと云ふのぢや。」

「ホ、ハ、ハ、まだ解らないんだらうか。」これは半ば獨語。

「公然結婚する氣で居るのか？」

「何遍云つてもおんなし事です。」

「然し桐代！」

「又初まつたよ。」と小聲。

「若し彼の男がぢや、實は大罪のある男で、社會を欺くと同時に、お前をも誑して居つたのぢやとしたら如何か？」

「そんな筈はありませぬもの。」
「イヤ、萬一左様であつたら？」
「よしんば左様であつたにしろ、可愛い人は矢張り可愛いもんです。早い話が、河豚は毒ですつてね。けれども大層甘しいとすりやア、毒ッて事も忘れッちまつて、食べる人さへあるぢやありませんか。」
「お前もなか／＼哲學者ぢやナ。」
「何てすか。」
「如何にもあの吉里は河豚ぢや。それでお前はもう中毒しとる。」
「嬉しい事！」
「何ぢやと？」

「いゝえ、此方の事です。」
桐代は又空嘯く。山野は酷く腰を折られた様に、一時は言葉に行詰まつたが、顔色は漸く熱して来て、膝を我知らず進ませながら、
「然し桐代！」と、力を込めた聲。
「何てすねエ、まだ仰有る事があるんですが？」と、如何にも五月蠅さうだ。
「お前はもう何様な事があつても、再び私の有になる氣は無いか？」
「……」斜に見やつて返事も無い。
「何らぢや？ もう一度以前の體に成らんか？」
桐代は少し體をねぢ向けて、

「貴君！ 山野さん！ 貴君人を馬鹿にするのも、好い加減にして下ださいまし！」

「イヤ決して馬鹿にやアせん。」

「冗談ぢア無い……」

「無論冗談ぢや無い。私は真面目ぢや。心から云ふのぢや。何うぢや桐代！ 私はもう今迄の事は、全く水に流してしまふが、何うぢやお前も、彼の事は一時の夢と諦めて、もう一度私の手に來んか。ウン、何うぢや？」

「知りませんよ。」

「と云ふのも他では無い。今此儘に棄て、置いては、お前が見す見

す悲惨な地位に陥る。それが如何にも忍びんからぢや。で、諾と云ひさへすりやア、もう決して此所には置かん。直ぐに私が引取つて行く。……此所に居つては如何にも危険ぢや。さ、返事は今の中ぢやぞ。何うぢや、否か？ ウン？ 桐代！」

と、遂に手を出しかける。その手を毛蟲の様に嫌つて、
「氣障だよ此人ア……ほんとに貴君も呆れた人だ。一旦奇麗に去つた女に、何ですぬエ未練たらしい！ 貴君も男ぢやありませんか。男なら男らしく、去つた者なら去つた様に、手出しなんか成さるものぢやありません。」

「如何にもお前は去つた女ぢや。然し去つたのは體ばかりで、心か

らは去つちや居らん。」

「まア！ 私はまたお生憎様で、體が貴君に附いてる時分から、心はとうに去つてましたワ。」

「これは御挨拶ぢやナ。」と、苦笑つて、「ぢやがそれも私は承知ぢや、それでは私も諦らめて、お前には改めて、別に好い婿を見立てゝやらう。」

「ホ、ホ、ホ、憚り様ですこと！ お婿さんなら一人て澤山……私やア貴君なんぞの様に、立派な奥さんのある癖に、厭な者まで金づくで、無理に云ふ事聞かせる様な、そんな了簡には成れませんからチ。」

「ウン、それぢやアお前は何うしても、私の云ふ事は聞かれんぢやナ？」

「ハイ、今までさんざ聞かされましたから、もう今度から聞きません。ハイ、もう聞く義務もありません。」

「貴様の爲を思つてもか？」

と、山野の顔は漸く權を示した。

「貴君もまた今の私に、爲めを思つて下ださるにも及ばないぢやありませんか。」

「よし。貴様が飽までも其氣なら、私も男ぢや、もう何も云はん。」

「ホ、ホ、ホ、やつと男にお成んなすつたの？」

嘲る桐代を尻目でグツと睨めて、

「今にさつと思ひ知るぞ。」

「オ、恐い！」

「ぢやが貴様を何うせうとは云はん。」

「そんなら誰を？」

「今に知れるワ。」

と、山野は冷かに笑ひながら、身を椽側の方へ退いて、しづかに庭の方を見る。折からの夕風に、鉢前の八手は團扇の様に揺れて、熱したその額を冷し初める。

以前の婆やは、慌しく入つて来た。

「御新造さん！……あの……」

と、山野に氣が付いて、又度膽を抜かれた様に、只オツ／＼と言葉も無い。

「何うしたんだ子、婆や！」

「あの……あの……大變で御座いますよ。」

「お歸んなすつたの？」

「イ、エ、それ所ぢやありません……あの巡查さんが……」

と、云ふ時廊下を強く鳴らして、一人の警官が入つて来る。

「アラ……」と、桐代は眉を寄せて、我知らず椽の方へ出やうとする。警官はツカ／＼と進んで、

「町田桐代とは貴女か？」

「……ハ、ハイ！」

「では一寸御同道下さい！」

「わ、私、何もそんな記憶は……」

「吉里藤二郎の監視盗事件で、少し取調べる事がある。」

山野は椽側から、

「ではもう捕縛されましたか？」

「ハイ、先刻会社からの歸途に。」

「エ、吉里さんが何ですつて？」

「吉里は会社の金を盗んだのぢや。大盗人ぢや。大悪人ぢや。」

山野は心地好げに云ふ。

桐代の顔は忽ち土の様に成つた。そして異様に光る眼は、山野と警官と見較べ、唇は堅く咬み締められて居る。總身は震へ出して……

山野はわざと猫撫聲に、

「どうぢや桐代！まだ私の云ふた事が解らんか……」

桐代は恨し氣に睨み返へして、

「ちッ、畜生ッ！」と、咬んで吐く様。

「何ぢやとッ！」

山野は思はず寄りうとする。

警官は押し隔て、
 「さ、参りませう。」
 桐代は強く衣紋を搔合せて、
 「ハイ参りますとも……吉里さんの行く所なら、何所だつて行くんです。」

(四十年稿)



三 髪半日

奥で呼鈴が鳴る。

「松や！ 旦那様が召してらつしやるよ。」

「はやく行つとくれ！」

喜美子は鏡臺の前で、
 今解いた髪を捌きながら、
 勝手の方を向いて云ふ。

勝手に働いて居た松やは、
 急いで手を前垂て拭き、
 今の聲がよく通らなかつたと見えて、
 喜美子の斜後の方へ来て、
 襟を外づけしながら、

「御用で御座いますか？」
と、片膝をつく。

「此所ぢや無いんだよ。旦那様ン所だよ。はやく行つとくれ！ 呼
鈴が鳴つてるぢや無いか。」

と、もう焦慮氣味だ。

而も松やは生温く、

「オヤ左様で御座いましたか。」

と、重い尻を起すと、椽側をドス／＼鳴らして、主人の書齋へ入つて行つたが、直ぐと引返へして来て、障子の根でまた膝をついて、
「奥様に御用なんて御座いますッて！」

と云ふ。

喜美子の髪は今や全く解き散らされ、それを後から梳いた所は、
何の事は無い黒頭の石橋、これであバケ！と出て行つたら、氣の弱
い火の番は、拍子木を投り出して腰を抜かしさうな姿だ。

「ナニ、私に御用だつて？……こんな頭して行かれやしないぢや
無いか。」

と、籠の様に下がつて居る髪の間から、斜に上目を使つて、

「何の御用だか伺がつてきとくれ！」

「はら。」

松やはまた奥へ行つたが、今度も直ぐ歸つて来て、

「奥様でなければ成らないんで御座いますッて。」
と、云ひながら、眼の底の方でニヤリと笑つたが、喜美子の視線は、
専ら鏡の中にのみあるので、それには頓と氣が付かない。

「何だつて？……私でなけりやいけないの？……仕様が無いね
エ……。ぢやアさう申上げて來とくれ、今髪を結びかけましたか
ら、少々御待ち下さいましたッて！」

「はい。」

松やはまた足を運ぶ。そして三度目の返事が斯うだ。

「それでは此方へ入らつしやいますさうで御座います。」
云ひすて、松やは、其後の事は關せず焉と云ふ風で、袂にした襦

をまた出しかけながら、勝手の方へと引揚げて行く。

「仕様が無いねエ。こんな所へ入らしたつて……少し待つて、
下ださりやアいの……」

と、眩きながら急いで髪を束ねやうとしたが、急ぐと自分の手まで、
兎角自分の云ふ事を聞かなくなるから、思ふ様には束ねる事も出来
ない。

「松やく、一寸來とくれ！」

「はい、何で御座います。」

「今度は私の御用だよ。後生だから一寸來て、この根を巧く結はい
とくれな！」

と、自分の用だと聲まで優し。

「私で宜しう御座いますか知ら？」

「何でもいゝから早くよウ！」

「ては御氣味がお悪う御座いませうが。」

と、松やは摺りよつて喜美子の後へまはり、命の如く髪かみの根ねを結びかけた。元結もとむすはキリ／＼と鳴る。

「これでよろしう御座いますか……」

「そんなにしちや痛いぢやないか。」

「ホ、ホ、御免遊ばせ！」

またゆるめて締め直す。

「如何で御座います？」

「何だか此方の方が吊れる様だねエ。」

松やは覗き込みながら、

「左様で御座いますか。それでは……」

と、初はじめてからまたやり直して、

「今度は宜しう御座いますか。」

「さうだねエ……好い様だよ。」

「何しろ御髪みかみが澤山たくさんで居ゐらつしやいますから、なか／＼私共わたくしどもには扱あつかひされません。御悪みわるけれりや御直みただし申しませしやうか？」

「……まア可いいよ、御苦勞みくろうだつた。」

「何う致しまして……」

松やはまた勝手へ下がる。

あとに喜美子は、自分の手に髪を掴んで、尚揺つて見たり、抑へて見たり、合鏡をして見たり、………實はまだ氣に入らない様だが、仕方が無いと云ふ風で、そのまゝそろくくと束ねにかゝる。

所へ主人の和男は出て來た。

「なんだ、まだ髪結つとるのか？」

「アラ、郎君もう入らしつたの………こんな所へ困るぢやありませんか。御用なら参りますのに………！」

「でも其方が來られんと云ふから、わざと此方から出張に及んだ

んぢや。」

「だから一寸待つて、下ださりやいゝのに。」

「所がそれが待たれん用ぢやから。」

「そんなら松にでも仰有つて下だされば………」

「松に云うたつて要領は得んサ。」

「ですから待つて下ださいと申上げましたのに………」

「お前の髪結が初まつたら、一時間や二時間で埒が明くんぢや無いからなア。」

「ひどい事仰有る。今日は直さ結つて御覽に入れますよ。」
「面白い、拜見しやう。」

聊か侮蔑されたと感じた喜美子は、一心に成つて又頭に手をあげ、たぼの膨らせ方に苦心して居る。和男は坐つて、ぢつとその手許を見入りながら、

「オイ、それぢやアあんまり出過ぎるよ……」

「さうでしやうか？」

「流行か何か知らんが、束髪であんまり後尾を出して、衣服を扱衣紋に着とるなア、乃公は嫌ぢや。感服せんなア。」

「では……此位なら？」

「ウン……それでも出とる。もつと其所を引詰めて……縮好く結ふ事ア出来んかなア。」

「そんな事仰有りやア、また初めから結び直さなけりや成りませんワ。」

「仕方が無い。姑息な手段で行かんのなら、根本的に改造するサ。」

「そんなむづかしい事仰有るから、また長くなりませよ……」

「ハ、ハ、ハ。そろそろ罪を人になすり付けるナ。然し喜美イ！髪の手を云はれるなア、別に腹の立つもんぢやあるまい。」

「誰も怒りや致しませんワ。」

「さうぢやらう。男で頭の事に氣が附くのは、實のある證據ぢやさうぢやぜ。」

「さうですかねエ。」

と、平然と聞いては見せたが、何うやら頬の邊にポツと染まつた。その顔が鏡に映る。その鏡をまた和男が覗き込む。眼と眼とは鏡の中で合ふ。古い型だが、さて悪くは無いと見えて、二人は期せぬ笑を浮べた。

何時の間にか松やは、勝手の境の襖の陰から、大きな體を半分はみ出させて、此方をちつと覗いて居る。

だしぬけに玄關の格子が開いた。間もなく書生の竹田が、名刺を二枚持つて来て、

「旦那様に一寸……」

「誰だ？ また保險會社か？ 野元が餘計な紹介なんぞしよるもんぢや

から……仕方が無い、通せ！」

「はい」

竹田を立たせた後で、和男は一寸兵子帯を締め直しながら、氣の進まぬ様子で座敷の方へ行く。

その後で松やは、思ひ出した様に入つて來た。

「奥様！」

「何だねエ……」

「肴屋が参つとりますんですが……」

「さう、何があるの？」

松やは品書の附木を出したが、喜美子はそれを見て居る間も惜し

「何だか其所で讀んどくれ！」

「タイ……イビ……」

「何だねエ、鰻の事だらう。」

「でもイビと書いて御座いますもの……」

「まア可いから先きを讀んどくれ！」

「それからセイゴ、キス……シラメ……これ何で御座いましてやう？」

「どれ？」

両手を頭にあげたまゝ、覗込む。

「さうだねエ……何てエ字だらう。他はみんな假名で書いておきながら、生意氣にこれ計り本字で書くから、解らなくなつちまふんだよ。行て聞いて御覽んよ！」

「はい。」

松やは勝手口の方へ行つたが、笑ひながら歸つて来て、

「ホ、ホ、奥様馬鹿々々しいぢや御座いませんか。」

「全體何なんだエ？」

「當メなんて御座いますつて、するめの事なんて御座いますよ。」

「いやだねエ。何故そんな事書くんだらう。」

「でも……するは縁起が悪いツて、よく商人はかつぎますんで御

座いますよ。硯箱の事を當箱、摺鉢が當り鉢……」

「ホ、ホ、そんな事云つたつて、私達にやア解らしないワ。」

「みんな舊弊もんの申す事で御座いますからねエ。……では奥様、何に致しましやう？」

「さうだねエ、……旦那様は鰻がお好きだから、新らしいといゝんだけども、……生きてるかイ？」

「何だか髯を動かして居りましたよ。」

「それならそれとねエ……」

と、云ひかけたが、髪の方に氣を取られて、後の語を容易に次がな

「鰻を取りますんで御座いますか？」

「はア……」

「何尾に致します？」

「……」

「二尾宛お附け申します様に致しましやうか。」

「……さうだねエ。」

「ア、……奥様！またお解さ遊ばすんで御座いますか？」

「だつて旦那様つてば、たばの出たのは嫌ひだつて仰有るもんだから、またやり直さなけりや成らないぢや無いか。」

「でもねエ、割によくお氣がお付き遊ばすんですねエ。餘程實がお

有りになるんで御座いますよ。』
『いやだよ、松やまで。はやくお出でよ。肴屋が待つてるんぢや無いか。』

『でもまだ承はらないんで御座いますもの。緞は四尾で宜しいんで御座いますか？』

『さうだつけ……大きいかエ、小さいかエ？』

『左様で御座いますねエ。此位も御座いませうか。』
と、其所に有合せた鬘櫛を指す。

『それなら二尾宛ていゝねエ。』

『よろしう御座いますとも。』

『ではさう仕とくれ！』

『はい。』

松やの出で行つたあとは、喜美子はまた捌き髪に成つて、初めからの結び直しに、苦心の頭を垂れたり、擦げたり。かうなるともう鏡の方でも、漸く退屈して來たと見えて、何時か搖んだ栓の工合でガクリと少し仰向きはじめた。喜美子は驚いて、それに支へをしやうとしたが、生憎手頃の物が見當らない。仕方が無しに一策を案じて、鏡臺を摺りよせて行つて、鏡を障子に凭せかける様にした。

こんな事で手が脱けて、髪はまた結び直し。

漸く客が歸つたと見えて、和男は椽傳ひに座敷から戻つて來た。

「何だ……まだやつてるのか。」

「だつて郎君が……あんな事仰有るんですもの、また初めつから結ひ直してゐるんですワ。」

「さうか、そりやあ氣の毒だつたなア……ぢやが、さうして解いた所を見ると、お前もなか／＼好い髪ぢやぜ。」

「存じませんよ。」

「自分の髪を知らん奴があるもんか。イヤ、全く美髪ぢや。」

「そんなに仰有られると、尙巧く結へなくなりませすワ。」

「髪が好くて、巧く結へんと云ふのは不思議ぢや。」

「それは私が下手だからですワ。」

「そんなら髪結に頼めば可い。束髪ぢやと云うて、必ず自分で結ぶものと限りはすまい。」

「そりやアさうですけれども、私の様な者がそんな大層な事するとそれこそ頭が曲つてしまひます。」

「アハ、折角髪が好く出来ても、頭が曲がられちや困るなア。」

「曲ると云やア、お前旋毛は何所にある？中央か？」

「いやですよ。そんな物御覽にならなくつても……」

「乃公等の様な五分刈とちがつて、女の旋毛は容易に見付らんもんぢやナ。……ウム、お前は生際も見事ぢや。」

「こんなに毛が下がつて居て、生際なんぞ見えや致ませんよ。」

「イヤ、此所の頸の生際が、實に行儀よく生へ揃つとる。」
「まア……如何しましやう？何か驕らなけりや成りませんと。さ
う、郎君のお好きな物取つときましたよ。」
「何か、好きな物とは？」
「蝦！郎君お好てしやう。」
「ウン、珍らしい物があつたナ。……然し乃公の好きぢふ事を、お
前何うして知つとるか？」
「だつて郎君？日外大森へ入らした時、あの何とか云ふ家で、よ
く召し上つたぢやありませんか。」
「オ、よく覚えとつた。お前もなか／＼實があるぞ。」

「でも私あの時は、ほんとに極りが悪う御座いましたワ。女中の居
る前で、私の分まで召上るんですもの。」
「アハ、それが悔しいので、覚えとつたのか。」
「アラ、さうぢや御座いませんよ。随分酷い事仰有いますのねエ。」
「イヤ、今のは冗談ぢやが、蝦は有難い。然し何うして食はせてく
れる？」
「ですから郎君の御好の様に、只今なら何うにでも成りますよ。」
「では一つフライにして貰はうか。フライお前出来るぢやらう。學
校で習つたらう？」
「フライ位なら出来ますでしやう。なんぼ私が無器用でも……」

「イヤ、お前はなか／＼料理が巧かつたよ。日外お前の所へ招ばれた時分、あの時の御馳走は、大方お前の手料理ぢやつて、岳父さんが自慢して居られた。」

「いやな事……もうあの時分の事仰有らないて下さいよ。」

「さうして……飯の後に洒落た西洋菓子が出たが、あれまで娘の手製ぢやつて……」

「もう澤山よ……そんな事仰有るもんだから、また結び損つたぢやありませんか。」

「……さうか……そりやア氣の毒ぢやな。……ぢやア食物の話は廢さう。然し、あの時は、たしか日本髪の様ぢやつたが、あれも

好かつたよ、一度また結うて見んか。」

「厭ですぬエ。餘所の家へ嫁付いてまで、まさか桃割に結はれやしませんワ。」

「ナニ關ふもんか。人の妻と成つては、桃割に結ふ事成らんなどと云ふ、法律でもあるなら知らんこと……」

「……それは郎君さへよろしければ、何様にでも結ひますけども……その代り戶外へ出られやしませんから。」

「アハ、ハ。それぢやア家に計り仕舞込んで置くか。それこそ坂居は細君孝行ぢやと、いよく友達が評判するぢやらう。」

「まア……皆さんそんな事仰有るんですか？」

「ウン云つとる。云うたつて關はんぢや無いか。」

「でも……酷い事仰有るのねエ。」

「然し野元は親切ぢや無いか。今も保險會社を紹介するのに、細君の爲めを思ふなら、是非保險をつけて置けと云ふんぢや。」

「ほんとに御親切ですこと子。ホ、ホ。それで郎君何と仰有いました？お付けに成つたんですか？」

「イヤ……まア考へとかうと云つておいた。……お前とも相談してと思つたから……」

「アラ、そんな事仰有つたんすか？」
「うん。」

「私と御相談なさるなんて？」

「イヤ、そんなこと云やアせんさ。」

「まさかねエ……」

と、云ふ中漸く前髪が膨らんで來た。喜美子は額越しにちつと鏡を見込んで、庇の高低を測量して居る。

和男は横からつく／＼と見入つて、

「さうだ。その位で丁度好からう……イヤ、もう少し出た方が似合ふかナ？」

「斯うですか？」

少しせり出させて見る。

「イヤ、待て〜！それぢやア後との權衡が取れん。……もうちつと低く……イヤ、引込ますんぢや無い、只上から抑へる様にする。さうだ〜。それで可からう。」

和男は満足氣に點頭いたが、喜美子はまだ心の濟まぬ體で、合鏡で右から見たり、左から見たり、……眼は代る〜、右へ左へと秋波を寄せる。そして前髪や鬢の後れ毛を、氣にしては上へ搔きあげたが、これは思ふ様に納まらず、又してもバラリ〜と来る。

「ほんとは……これが仕方が無いんですもの。」

「ナニ關ふもんか。束髪はあまり奇麗に出來たのより、多少は後毛のあるが好いもんぢや。西洋人のを見い〜それこそモシヤ〜して

後毛ばかりぢや。」

「それは髪がちがひますもの。」

「髪はちがつても、已に束髪が舶來のものなら、西洋風に依るがよいちや無いか。無理に汕て堅めた、漆細工の様な束髪は、あまり感心したもんぢや無ぞ。」

「倉澤さんの奥さんのやうなの？」

「ウン、あれは閉口ぢや。いつも鬘を冠つた様な髪しとる。あんな束髪結ふ位なら、尋常に圓鬘にして貰つた方が可い。」

「それぢやアさう云つてお上げ遊ばせな！」

「他人の細君にまで、干涉するにやア及ばんからなア。」

「てすから倉澤さんに仰有れば可いでしやう。」
「然しまたあれが、倉澤の嗜好なのかも知れん。何うだつて可い、他人の細君ぢや。」

「それぢやア實が無んです子。」

「無論實は無い。また他人の細君に對してまで、何も實のある必要は無い。さうぢやないか。」

「それはさうですけれども……」

と、云ふ中喜美子は、櫛、リボン迄さして了つて、忙はしく手を拭きはじめた。髪は漸く出来上つたのである。

途端に工場の笛がヒューと聞えると、やがて號砲が障子に響いた。

「アライやた。もう正午ですぬエ。」

「日が短くなつたよ。」

喜美子は急いで鏡臺を形付けながら、

「お待遠さまで御座いました。さア御用を伺ひましやう。」

「御用とは？」

「先刻郎君の仰有りかけた……」

「何も云やせん。」

「お部屋で鈴をお鳴らしに成つて、私が参れないものですから、わざわざ御出ましに成つてらしたんぢやありませんか。」

「オ、さうぢやつたなア。」

「てすからその御用は？」
「何ぢやつたかナ？」

「いやて御座いますよ。お忘れなすつたんですか？」

「あまり永くたつたもんぢやから、すつかり忘れた……」

和男は今更頭を搔く。

この體を見て、可笑さを耐へながら、松やはまた入つて來た。

「奥さま！あの鰯は如何致すんで御座います？」

和男は初めて思出した様に、

「さうく、然うだつた。はやくあれをフライにしてくれ？」

(四十一年稿)



四 長 雪 隠

一 長年習慣に成つて居る、折角の日曜日、今日も朝からまた降つて居る。思ひ切つて寢坊をして見たいと思つたら、子供が泣くのでそれも成らず。第

道野譲はしばらく腹這に成つて、「やまと」に火をつけて見たが、やがてムクくと床を離れた。幾度か水に入つて、毛らしい物は大方痕をも失つた、茶縹の綿子の寢卷の、前のはだけて居るのをかき合はせ、はや鼠色に化けて居る、細いメレンスの帯を一寸締め直

すと、縁側へ出て一つ欠伸をしたが、其所に置いてあつた新聞を拾つて、其まゝ雪隠へと立て籠つた。

立て籠る！實に此男の雪隠は、入るのては無ゐ立て籠るのである。

彼は遺傳性の脱肛でもあるのか、尾籠な話だが、一旦雪隠に入つたが最期、早くて二十分、永いと約一時間餘りは、娑婆の人に成れないと云ふ、因果な持病があるのだが、慣れては本人さほど苦にもせず、其代り朝の新聞は、大方この臭い所で目を通すのを、殆んど日課の様にして居る。

で、その雪隠から出て来て、手水を使ひ了る頃には、ちやんと朝飯の用意も出来れば、役所へ持つて行く辨當も、已に包まれて居る

と云ふ寸法。飯を食ふと、辨當を持つて、

『それでは行つて来るよ。』

と、器械的に云へば、妻も同じく器械的に、

『へい、行つてらつしやい。』

と、云ひながら、勝手の境の障子をあけて、半分襷を掛けたまゝで、玄關の方を覗くのが、殆んど紋切形に成つて居るのだ。

去る程に、譲は例の如く雪隠へ入つた。入る時、ふと明け放した

儘の窓から、見るとは無しに外を見ると、其所からは隣家の物置が、丁度眼の前に成つて居て、そのコールドアの剝げちよろけた、低いトタン屋根とすれ／＼に、地境の建仁寺垣、それも古色蒼然として、

竹の面目を失つて居るのが、而も忠義顔に立つて居る。その垣の杭の所に、可なり大なる蝸牛が一匹、折からの雨を迎へて、四本の角を出来る丈伸ばして、さながら雲を突かんず勢。讓の眼には、正しくこの蝸牛が映じた。

『フン……』

と、何の爲めか一寸鼻を鳴らしたが、直ぐと中戸を入つて、常の如くふん跨がると、口にあつた「やまと」を、右の指の間に移して、直ちに日課の新聞を擧げた。

まづその第一頁。——論説はと見ると、何か外交問題らしい。それはまづ後まはしにして、やをら電報欄に眼を轉じる。

二百廿日の天候に付て、各地の様子が書いてある。各地とも左程の風害は無いので、本年の米作もまづは上況。『さうか、有難いな。』と腹の中。

已にして叙任辭令に来る。——その初から二人目にあるのは、自分の舊友の高見昇。他のは大方六號字であるのに、これ許りは五號字の而も黒點付。某省の書記官から、特に某縣の知事に榮轉して、括弧の中には高等官二等とさへ添えてある。

「ヤア、とうとう、勅任に成り居つたか。高見も運の好い男だなア。

……尤も學校に居つた頃から、頭腦の好い方ぢやアあつた。成績は必しも優等ぢやアなかつたが……何しろ元氣の好い、機敏な方

だつたからなア。此間迄四等の秘書官だと思つたら、もう高等官二等の知事だ。何しろすばらしい勢だ。然し藩閥だからなア。」

こんな事を考へながら、また「やまと」を口に咬へて、更に二の面をかへさうとすると、煙草の煙が急に鼻へ入るので、無格好に口を曲めて、せつなさうに眉を顰めた。その顔と云つたら無い。

二面の記事の中には、多少氣を止めるべき物もあつた。

「ムウ、井上さんもまた持ち直したナ。丈夫な方だ。何しろ急行列車を止めさせる勢だから……乃公なんざア、電車だつて止まつてくれん事がある。……いよ／＼米艦も来るな。然しこの不景氣ぢやア、大した催しも出来まいよ。ちつと金を撒いてくれ、ばい、が……」

……。大博延期の反對か、もう遅い／＼、喧嘩過つての棒ちぎりだ……。然しこれぢやア慾を張り過ぎて、却つて儲損なつた奴が多い。……そんな奴の面が見度いな。……は、ア、市勢調査の進捗か……巧く行くかな、イヤ、市勢調査と云やア、次男の届は何う成つとつたか知らん？ 産後は母親に病臥れて、大きに面食つてた時だから、ろくに記憶して居らんが……何でも届を忘れたので、出産の日を一ヶ月おくらしておいた筈だ。あんな事まで事實を云はなけりや成らんか知ら？……まアい、ワ、まさか罰金を取られもすまい。」

「やまと」の灰がバサリと落ちた。氣が付くともう口紙計りに成つて居る。急いで下へ投げる。口紙は下へ落ちて、幽かにジューと音

を立てた。

更に三面へと移る。小説がまづ目についたが、それも後廻しにして、直ぐに雑報に取りかゝる。二號字は收賄官吏の檢舉。

「は、ア、またやられたナ。何所だ？ 横濱の税関か？ ……然しこれも考へて見ると、同情すべき點が無くも無い。何しろ今時の時節に、官吏の俸給計りは、依然として卅年前の相場に依つとるんだからなア。…人生官吏と爲る勿れ！ ……それも高見の様ならいゝが…」

と、また叙任辭令を思ひ出す。

「大森の情死か？ 身許が解つたナ……それに船中の女房殺し…」

…何だ犯人は矢張り亭主か。然し原因は皆平凡なもんだ…。ヤ、富山の嬢さんいよく結婚するな。先は新法學博士？ ……ウソ……此間まで子供だと思つてたが……女はこれだから早いよ。」

不意に尻がチクリと痒い、急いで手を廻はしてピシリと打つた。が、確かに仕止めた筈の敵は、フーンと凱歌を揚げながら、更に耳をかすめて来る。

妙な手付てそれを打たうとすると、蚊は更にまた小鬚をかすつて高く、徐ろに、向うの壁へと引揚げて行く。

もはや立たねば手が届かない。恨めしさうにその行方を見送ると、

その蚊はやがて見失つて、却つて隅の壁ににじんだ、薄墨色の雨漏りの痕が、端無くも目に付いた。

「オヤ、よく調べて見やう、此分じや押入の中も怪しい。然し考へて見りやア、阿父が建つてから彼是二十五年に成るのだから、無理は無いが、……なまじつか自分の家だけに、差配へ尻を持つて行く事もならず……チョツ、また散財だ……」

今食はれた所が痒くなつて來た。手をまはしてボリ／＼やる。痒さ忘れに、また新聞を読みはじめ。今日は何う成つたかと、麟慶の義士傳を見ると、丁度高田の馬場の掛りの所だ。が、この仇

敵も、まだ二三日は命があらう。

懸賞の詰將基にも、一寸首を傾けて見る。解りさうで解らない。

地方の花相撲の勝負附を見ると、小常陸が兩國を投げて居る。

火事が三件、何れも一戸から三戸半止まり。

「江戸の花も振はなく成つたなア。此頃は株を田舎に取られた。」と、此間の新潟の大火を思ひ出す。

「イヤ火事計りぢや無い、近來は萬事が田舎本位で、江戸ッ子は段々肩身が狭くなる。」

と、そんな事を感じて來ると、何だか自分の長雪隠が、急に極りが悪くなつて來た。

速飯、速糞、速走り。よくおれの若い時分にやア、こんな事を云つて威張つてたものだが、その江戸ッ子も……今ぢア、田舎者の高見に負けて、彼の高等官二等に對する、漸くおれは判任一等……ア、馬鹿々々しい。」

思はず舌打をして立たうとしたが、まだ肝腎の用が便じて無い。恨めしさうにまた辭令の所を見て、直ぐと裏を返へして、今度は廣告欄を見ると、また氣が付いた。其所には秋間黄楓の、新作小説の何とやら云ふのが、再版として名乗り出されて居る。

「黄楓！ これも昔の學校朋輩だ。尤も彼は怠惰者で、教場には滅多に顔も見せず、偶に来ると駄洒落を云つたり、俳優の聲音を使つ

たり計りして居た。随て成績も甚だ悪く、卒業の時も尻から二番目と云ふ、甚だ不出來の男だつたが……何うだ？ 今ぢア、文壇の流行ッ兒、書く本もく版を重ねて、何だか此頃ぢやア、廣尾に地面を買つて、家屋も新築したと云ふ噂だ。……チョツ、彼奴も成功者の一人か。……」

と、感心しながら下の欄を見ると、此處には黒枠が三件計り並んで居る。

「イヤよく死ぬぞ。尤も時候が悪いからなア。然し死んぢやアおしまいだ。この男なんぞも、死ぬのでやつと位が上つた様だが、……本人が死んでしまつちやア、位も金も役に立つものか。イヤ、命あ

つての物種だ。人間雪隠の中にはあるとも、決して黒枠の中にある可らずだ。』

など、つい冗談も出た時、腹中の物も大方出たつて、譲は漸く年の明けた心地だ。

何時の間にか痺れた膝頭を、我と擦りながら立ち上る時、新聞はサラリと下に落ちた。それをまた拾つて、丹念に畳んで懐中に納め、中戸を押して出やうとする時、再び窓の外を見た。

今度も殆んど無意識であつたが、その眼にも物は映る。先刻の蝸牛は、まだ元の杭に取り付いて居た。

(四十一年稿)



五 一 二 時 間 目

『二人きりて何所かへ行つて、一日遊んで見たいもんだねエ。』と、ある時の一杯機嫌に、ふと口を滑べらせたが百年目、『ハア、

是非連れてつて頂戴な！ね、ね、屹度ですよ。嘘つくとき聞かせんよ。』と、爾來幾度か繰り返へされて、殆んど退引ならぬ破目と成つた。

去る程に、今日は十月十七日、神嘗祭で而も土曜日、二日つゞきの命の洗濯、かゝる時こそ契約履行に、蓋し屈竟の日柄なれと、五

藤も遂に勇を鼓して、同伴旅行を敢てする事と成つた。が、さて其行先は何所にしやう？ 大磯は月並だし、江の島は縁が切れると云ふ。熱海は億劫、箱根には知つた宿が多い。所詮東海道筋は、汽車の中も警戒を要するから、いつそ全く方面を變へて、稻毛はどんな物だらうと云へば、

「稻毛？ 私も今云はうと思つてたところ！ ほんとに私まだ知らないから、是非行つて見たいと思つてたのよ。」と、忽ち賛成を得て、まづ行先は千葉縣下稻毛。時刻は、午前十時半。兩國停車場に落ち合つて、それから一所にと極まつたのである。

但し、萬一その停車場で、何方かの知人が來合はせて居たら、男

は右の眼、女は左の眼を、一寸二三度瞬いて、互ひに差合を知らせ、再びその眼を動かすまでは、双方ツンと濟まし返つて、切符も別々に買ひ、車にも別々に入らうと云ふ、常座の暗號の打合せまで出来たのは、一日置いて前の晩であつた。

五藤此日の扮装は、豆子參謀の注意によつて、平生のハイカラをずつと避け、大島の裕に、鐵無地の羽織、帯もわざと角帯にして、帽子は縞羅紗の大黒形。常はピンと反らす髭も、今日ばわざと短く刈りこみ、これで例の眼鏡さへ外づせば、如何なる眼力の松王も、よも見頭はしは出來まいとは思ふが、これを取つては往來が窪んで、一歩も進まれぬ近眼の悲しさ。只常は金縁なのを、鋼縁に更へたま

て、餘議無く御免蒙つて置く。

五藤は待合室へ入ると、直ぐに一ト通り見まはしたが、幸ひ知つた者も無いので、安心してまた外へ出た。これは豆子を迎へる氣でも無かつたが、偶然にもその豆子は、此時丁度腕車から下りて、小股に壇を登つて来る所だつた。

勢ひ二人は顔を合はせた。が、側へは赤帽が來た。彼方には巡査が立つて居る。――挨拶は互ひの眼にのみ云はせた。

豆子は物馴れた風で、そのまゝ待合室へ入ると、後から車夫は、信玄袋と傘とを持つて、汗を拭きながらついて行き、豆子の掛けた側へ、此等の物を置いたと思ふと、頻りに辭儀をして引退がつた。

何でも祝儀を貰つたのらしい。

五藤は同じ室の戸口に凭れて、斜に豆子の様子を見ると、あれ程注意してあるのに、裕の縞柄と云ひ、半コートの様子と云ひ、履物の好みと云ひ、何う見ても只の鼠とは受取れず。纒に頭が束髪なのと、顔がいつもほど白くないのとで、當人は化け了うせた氣知らぬが、折々見える襦袢の袖に、尻尾のチラ付くのが承知しない。尤も斯う云つた風なのは、此頃の慈善演藝會へ行くと、徽章をつけて廊下爲を極めて居るから、見様では貴婦人族の一種として、随分通らぬ事はあるまい。など、五藤は、慾目でひとり折紙を付けて見る。

が、まだ迂濶側へはよれない。が、また寄つても見たい。――照
れ隠しに中央の卓子にもたれて、見度くも無い新聞を見て居る。
所へ赤朝は、大きなカバンと傘とを抱へて来て、ドサリとその臺
の上に置いた。五藤は少し身を除けて、そのはづみに豆子の掛けて
居る側へ来ると、豆子は少し座をよけながら、伸上つて何か云はう
とした。

と、見ると五藤は、急いで右の眼を瞬いた。と、見ると豆子は、
急に済まして、元の座に直つた。が、五藤は直ぐに氣がついて、今
の暗號は何の爲めだつたらうと、我乍ら怪訝に耐へなかつた位だ。
然し念の爲めと、五藤は室内を見まはした。見ると、今のカバン

の主は、テーブルの側に立つて、ぢつと此方を見て居る。赤ら顔の
五十近い、一見田臭紛々として、而も懐中は温さうな紳士。

五藤は見た顔でも無いので、そのまゝずつと他へ寄ると、入れち
がつて紳士は、豆子の方へ歩を進めて、

「オイ……一人か？ 何處へ行く？」

と、はや太い聲をかけた。掛けられた常人より、五藤はギョツとし
て後を見た。

て、常人はと見ると、流石に度を失つた體で、

「まア久濶……」

と、立つて挨拶まではしたが、どうも後の句が次げない。

さては此奴も馴染かと、五藤は安からず思つたもの、彼の風采彼の態度、また必ずしも案じるには及ばぬと、思ひながらも氣を配つて、カバンにある名刺を見ると、『千葉町徳部多七』と、石版で摺つてある。

千葉町の住人とあるからは、此奴稻毛まで、何うしても同車だ。此室へ来たからは、まさかには赤切符の客でもあるまい。然し、それもよいが、豆子をいつそ彼の同伴と見せて、此方は高身の見物も妙だらう。

などと思ひ直すまでに、紳士はまた二言、三言、豆子と言葉をかはして居たが、何の爲めかグツと此方を見た。

見られると、脛に疵、伏目になつてまた新聞を手にした。途端に横合から、

『五藤先生ぢやありませんか。』
南無三寶！

かゝる場合は度胸を据ゑて、飽くまで白を切らうとは、兼ての腹算にあつたのだが、不意を突かれると他愛は無い。

『ハッ？』

と云ひながら面をあげた。

『先生、まことに御無沙汰致しました。』
と、相手は慇懃に禮をする。

先生と云ふからは、曾て自分の教へた學生であらう。顔はたしかに見覚がある。が、名は一吋思ひ出せない。

相手は何所までも馴々しく、

「すつかり御様子が変わつてゐるもんですから、お見それ申してしまひました。今日は何方へ？」

「ハア、一寸……その……君は？」

「稲毛に友人が居るもんですから、遊びに行つてやらうと思ふんです。」

稲毛？　こりや自分の藏の方にも、いよく火が廻つて來た。

然し表は水の如く、

「稲毛？　それはお樂だ子。」

と、冷かに云つたもの、胸はトン／＼云ひ出した。

「先生は？」

執念く聞く。

「我輩か……我輩は」と、少し問へて、咳拂をして、……「まだ

成田を知らんから……」

「成田で御座いますか？　妙な所へ入らつしやいますナ。」

「ウン……」

「お一人？」

「……ウン……君は？」

『まだ友達が来るんです。』

それなら早く行つてくれればよいにと、思ふ時彼方で鈴が鳴つた。學生は慌て、切符口へ行く。

ホツと息をついたが、自分も切符を買はねば成らぬ。それにしても豫定の稻毛は、大いに警戒を要する事となつた。じしろ今出まかせに云つて、當座を胡麻化した成田にしやう。

が、さア困つた。例の瞬の暗號は定めたが、かゝる場合に應用すべき、無線電信の設備は手ぬかつた。五藤の旨は徒らに躍る。

が、仕方が無いから歩を運んで、一二等の賣口へ来ると、幸ひにも豆子は、眼を他へ反らせながらも、五藤の側について来る。五藤

は聞えよがしに、

『成田まで二等……一枚!』

入れ代つて豆子が、何を買ふかと耳を濟ませば、これはしたり! あの聲が聞えなかつたか?

『ちよいと……稲毛まで頂戴な!』

『エヘン!』

咳拂をして見ても、一向通じが無い。青い稲毛までの切符は、已に授受を了つてしまつた。

切符をつかひと、やがて豆子はプラットホームへ出た。五藤も少々後れて續いた。

然し同じ室には入らない。豆子が前のに入つたのを見て、自分はずつと後のにした。

處へ例の千葉の紳士は、急ぎ足でやつて來たが、赤帽が此室へカバンを入れやうとするのに、前がよい、前がよいと、急いで豆子の方へと行つた。考へて見るとイヤな奴だ。

さて學生はと見ると、何うしたのか見當らない。もう乗つたのか、まだ來ぬのか？ いつそ乗らずに居てくれればよいが。

おれは折角成田を買つたのに、豆子は、感の悪い、矢張り稻毛を買ひ居つた。一人て降ろす譯にも行かぬ。

と云つてかう離れては、その山を通じる術も無い。よし、通じ得

たにしても、先には例の千葉のが乗つて居る。

困つた。こんな困つた事は無い。だから遠出はいやだと云つたんだ。と、愚痴をこぼしても追付かない。汽車はもう動き出した。

見ると、自分の乗つて居る室は、不思議にも自分一人だ。この休日になりとは珍らしい。こんな事なら初めから、二人でこれへ乗ればよかつた。あゝ満らない真似をした。

然し此分で行くと、豆子は稻毛で降りるに極つて居る。仕方がないから、おれも一所に降りるとした所が、あの學生が危険だ。彼奴は稻毛へ行く奴なのだ。

が、果してこれに乗つたらうか？ 先刻から氣をつけて居たが、

どうも見當らない様だ。そんなら差支無い様なものゝ、兎も角稲毛は物騒だ。いつそ彼所は中止して、矢張り成田にした方が可い。イヤ、成田も賑かな所だから、又何様な奴に會はんとも限らんが。まゝよ、何も人の妻を盗み出したんぢや無い。良家の處女を誘ひ出したのでも無い。おれの腕でおれが爲る事だ。さうだ、……下だらん心配するには及ばん。

市川を渡り、中山を過ぎ、船橋に来る迄には、大分度胸が据わつて來た。

が、氣になるのは豆子の様子だ。此所が行合の場所なので、汽車はまだ動き出さない。見れば便所へ下りる客もある。

五藤もやをら車をおりて、ブラリ〜と進んで行て、前の二等車の室をのぞくと、豆子は隅の方に座を構へて、新聞か何か出して見て居る。その向側には、例の千葉のが陣取つて、煙草を吹かしながら、何だか話しかけて居る様だ。——よく〜氣障な奴に相違無い。

其中に驛夫に促がされて、五藤はまた元の室へ戻つた。

津田沼、幕張を過ぎて、いよく汽車は稲毛につく。念の爲めに窓から覗くと、豆子は前の箱から出た。千葉のは窓から首を出して、又しても何か云つて居る。

もはや猶豫の場合で無い。五藤も倉皇として車をおりて、一番後ればせに改札口から出た。

其間も眼を配るに、先刻の學生の姿は見えない。思ふに同伴が來なかつたのであらう。まづ安心と胸を撫て、停車場の外へ出ると、其所に豆子が立つて居る。

豆子は懐かしげに歩みよる。五藤も思はず之に近づく。

「郎君！」

「如何した？」

二人は今朝顔を見てから、やつと二時間目に言葉をかはした。

(四十一年稿)



六 黒面騎士

英語で所謂ナイト、獨逸語ではリッター、字書に譯して勳爵士、若くは騎士と呼ばれたものは、中古の歐洲史の花とも云ふべく、之を我邦に例を取れば、元祿の世に羽振を利かせた、彼の旗本八萬騎なるものと、聊か似通つた趣がある。

随つてまたその間には、種々な逸話奇聞もあるが、今その一つを紹介して見やう。

頃は何時なんめり、西曆第八世紀、有名なる彼のチャールズ大王

が、多年侵略の功を奏して、マンイ川の畔なる、フランクフルトの宮殿に於て、めて度く戴冠の式を挙げた時の事である。晝の間は壯嚴なる儀式に、何れも禮服の肩を凝らしたが、夜は寛ぎの無禮講とあつて、假面舞踏會が行はれる事になつた。只見る華燭燦爛たる、幾百坪の大廣間は、赤に青に、黄に紫に、今日を晴と着飾つた、例の騎士を初めとして、之に扶助けられ、款待なされるのを、無上の榮譽と心得て居る、貴婦人、令嬢の誰彼はさながら秋の空に星を算へ、春の庭に花を競べるかと計り、何れ大王の稜威の程を、稱へ祝がぬものはなかつた。が、その中に只一人。萬綠叢中の紅ならで、萬紅叢中の黒一點、

帽も、マントルも、腰帶もズボンも、漆を欺く黒裝束。黒い假面を形の如く掛けて、何うやら少しはにかんだ様子は、何の事はない孔雀の檻へ、一羽の鳥の紛れ込んだと云ふ景色。さしづめインツプの材料になりさうな所だ。これを見た一座の者は、好奇に目引き、袖引き、『全體ありやア何者だ？ このおめて度い御宴へ、喪服なんを着けて出るとは、何と云ふ行儀不知だらう。』『あんな者を此所へ入れて、よく式部官が黙つて居るなア。』『なんぼ假面會だと云つて、悪洒落にも程のあつたものだ。』など、此所でも彼所でも噂とりく。

然し當人の鳥先生は、燕雀何ぞわが志を知らんと、一廉の大鵬氣取り、やがて孔雀の中の孔雀とも云ふべき、チャールズ大王の王妃の前へ、ツと計りに歩みよつて、片膝を突き手を胸に當て、恭しく一禮をしながら、

「恐れながら殿下、お相手願はしう御座ります。」

と、折からの奏樂を機會に、連舞の所望を申出た。

かう云ふ會の作法として、女が男に相手を申込まれて、之を斷ると云ふ事は、よくくの侮辱になるのだから、大體の者には手を取らせて、一ト廻りでも共に踊るのを、まづは女の愛嬌としてある。

されば王妃も、その異装の騎士に挑まれて、聊か氣味悪う思はぬ

でも無かつたが、さりとて耻をかゝすも氣の毒と、澁々ながら立ち上り、緞手をしばらく其者に委ねて、一所に一曲を踊つて見て、驚いた。

その扮装の陰鬱なのに似ず、踊振が如何にも快活で、これに身を預けて居れば、我知らず足も浮く面白さ！

やがて樂が一曲済むと、黒い騎士は殿下を扶けて、元の安樂椅子の席に着かせ、また懇懇に會釋して、其場を引退がらうとする時、

今度は殿下から言葉で、

「次の曲も其方と舞はうぞ。」

と、有り難い御沙汰が出た。

側に居合はせた待従の何某は、これを洩れ承つて、思はず眼を圓くしながら、黒い騎士を見詰めたが、その眼の中には云ふ迄も無く、艶羨の念が溢れて居た。

程無く次の曲が初まると、王妃は黒騎士をさし招いて、はや共に舞ひはじめた。殿下は聞えた舞踏の名人、それに十二分の驥足を伸ばさせるまで、巧みに相手をつとめる騎士は、そも何所の何人であらう？

よもや只の鼠ではあるまい、はやく化の皮を剝がせ度いものだと、假面脱除の時刻の來るのを、何れも今は待乗るに至つた。

一體假面舞踏會と云ふものは、假面を被つて居る間こそ、誰が誰

やら互ひに知らせぬ様にして、随分の無禮を免し合ふが、その中一定の時刻が來ると、合圖と共に一齊に假面を脱いで、これはくくと呆れ合ふ所に、又一層の興味があるのだ。

此夜も次第に更けて、やがて正體を現はすべき、時刻は漸う近づいて來る。

人々の胸の中には、好奇の波が次第に高まつて來る。あの悪鬼は何所の公達であらう、この老仙は彼所の令嬢ではあるまいかと、意外の正體の現はれるのを、各自待ち構へて居る中に、例のぬれ鳥の黒騎士こそは、まだ何人とも目星が付かず。はやく彼の皮剝かせて見度やと、衆目等しくそれに注いで、漸くその周囲は賑つて來る。

すると、何思つた黒騎士は、恭しく王妃の手をさしげ、それに敬禮の接吻を施して、さて聲を低めながら、

「殿下、まことに失禮を致しました。」

と、云ひすて、其所を退がらうとする。

今まで散々相手をしておきながら、いざ正體を現さうと云ふ段に成つて、急に委を隠さうとは、返すくも心憎い奴と、王妃は何てこれを免さう。

「いや、行く事はなりません。」

と、またその手を取らうとする。

「いえ、勿體無い……假面の中こそお側にも参れ、私の本性が知

れましては、とても此場には居られませんから、何卒お見免しを願ひます。」

と、又しても影を晦まらうとする。

王妃は急いで侍婢に目配をすると、侍婢は心得て、黒騎士の前に立ちふさがり、

「あの洞然な鳥の少将さま。お姿ばかりと思ひの外、さりとはお服

も黒騎士さま、逃げやうとて逃がしましやうか。たとひ東が白まう

とも、その化の皮脱がぬ中は、こゝ一寸も去なませぬ。」

「イヤ、そんな冗談仰有らんで、何卒私丈は歸へして下ださう。

面が無くては此様な所に、所詮居られぬ身上ですから。」

と、一心に成つて逃げやうとする。途端に一聲合圖の鳴物、これに連れて人々は、皆一度に假面を取つたが、まづ誰よりもこの騎士はと、見ると彼は床の上に伏して、何故かまだ假面を取らない。
『さては彌々怪しい奴。事によつたら敵方の間者か、それとも殿下を狙ふ曲者、方々御油断めさるな！』
など、先刻からの王妃のお相手に、大分業を洩かして居た、血氣盛りの騎士達は、はや劍の柄に手をかけながら、黒騎士の四邊に詰めよつた。

今は黒騎士も絶體絶命、あはれ一人の荒武者に、その襟頸を引摺まれて、大王の前に引据ゑられやうとする。

王妃はまた氣の毒がつて、
『コレ、そのやうな手荒い事はせずとも、假面さへ取れば解る事ぢや。』

と、云ひながら進みより、遂に親ら手を下だして、その黒い假面を脱がせて見ると、——これはまた雪かど計り、色は白く、眼は涼しく、鼻筋通り、口元締まつて、威あつて猛からぬ丈夫の相好、天晴れ一流の騎士とは見えるが、さて何所の何某やら、誰一人見知る者も居らず、只互ひに顔見合はせて、何やら囁き合ふ計りであつた。

此時チャーレス大王は、徐かに其前に進んで、
『凡そ今の世に騎士と呼ばれる者、このチャーレスの見知らぬは無

いに、御身に會ふは今宵が初度、そも何所の何人か？」
と、尋ねると、騎士は額の汗を拭きながら、

「お見知り置かれぬこそ道理なれ。元より私は騎士でも無ければ、
また武士の端にも算へられませぬ、世にも賤しい刑吏で御座ります
る。」

と、皆まで聞かず王妃は、アレッと計りに大王にすがり付いて、は
や總身は劇しく戰慄へる。

刑吏と云へば斬首、磔刑を、日毎その手に掛けるので、さながら
温棒か穢多の様に、彼地でもひどく卑まれたものだ。

大王はこれを聞くと、怒髪忽ち冠を衝いて、

「ナニ、おのれは刑吏とな？ よくもく姿を變へ、この殿中へ紛
れ込んで、目出度い席を汚した計りか、人もあらうに我が妃と、手
を取り交はして舞ひ居つたな。不埒者め、其所動くな！」
と、はや佩劍の鞘を拂つて、既に斯うよと見うけられた。

けれども刑吏は少しも騒がず、

「元よりお手討は望む所。斯くあらんと初めから、覺悟致して居れ
ばこそ、身に喪服を着けて居りますれ。たとひ一夜、半夜でも、ま
ことの騎士の群にまじつて、世にも貴い王妃殿下と、共に舞踏の光
榮を得ますれば、このまゝ死んでも恨は御座りません。まして大王
お手づから、御成敗下ださりまするとあらば、一期の面目、後日の

名譽、願うても無い事で御座ります。イヤすつぱりと遊ばされませ！」

と、今は顔容自若として、劍の前に端然と控へた所は、天晴れ眞の騎士と云うとも、耻かしからぬ面魂。一座は片唾を呑む計りて、誰一人これを止める者もなかつたが、大王は流石に豪傑、何か心に點頭くと、しづかに劍を鞘に納め、却つて刑吏の手を取つて、懇ろに助け起こしながら、

「イヤ、これは無禮を致した。見損うたは此方の過失。いかにも其方は騎士であつた。今の倉忽は免されよ。」
と、思がけない挨拶に、刑吏は却つて呆氣に取られ、

「この私を騎士と仰せられまするは？」

「オ、サ、苟も騎士で無い者、而も獄吏輩の卑しい者に、余が妃の手が取らされうか。騎士ぢや、其方は騎士ぢや。刑吏などは此宮中に、只の一人も来て居らぬぞ。」

と、大聲に觸れ渡し、さてこの刑吏に對しては、眞の騎士の禮を盡して、其夜は事無く濟ませたが、その翌日は改めて、その刑吏を宮中に召し、

「昨夜の汝の舉動、覺悟、チャレース殊の外頼もしく思つた。よつて今日から改めて、騎士の群に加へる程に、随分忠勤致してくれよ。」
と、世にも懇切な言葉、刑吏は肝に銘じて難有がり、この君の爲め

ならば、命は惜む所にあらずと、我を忘れての奉公に、いよく出
世をして、其家今日まで綿々と、貴族名簿に残つて居ると云ふ。

(四十年稿)



七 決闘記

麥酒と決闘！これは獨逸の名物である。
但し麥酒は、已に疾うから我邦に輸入され
て、其流行もますます盛んなるに反して、

決闘に至つては、未だ一向輸入される様子も無い。——否、あんな
野蠻な物は、一切門前拂を食はすがよいと、定めし眉を顰める人が
多からう。

無論決闘は野蠻である。然しまた一面から見ると、必しも排斥す
るには及ばぬ。その手段こそ感服せざれ、その趣意に至つては、寧

しろ賛成すべき點があるのだ。

その精神とは何？他無し研武、練膽！

左ほどでも無い事を根に持つて、——時としては、更に何等の遺

趣さへ無いのに、打ち合ひ、切り合ひ、瘡の付け合ひをする、馬鹿

々々しいと云へば馬鹿々々しいに相違無いが、その目的は、必しも

敵を斃して恨を晴らさうの、自分が勝つて友に誇らうのと云ふ、我

慢の點にあるのでは無く、却て之に依て武を研き、膽を練ると云ふ

のにあるのを見ると、我邦の封建時代に行はれた、武士の『果し合』

や真劍勝負に比して、寧ろ無邪氣に、また男らしい所が見える。

さればこそ彼國では、表向き法律で禁じてこそ居れ、實は默許の

有様で、例のビスマークや、また現カイゼル陛下の如きは、時に之を獎勵されたと云ふ位だ。

尤も此仕方に付ては、先に『洋行土産』の中にも書き、また近頃

の中學世界の臨時増刊、『歐米學生社會』の中にも、箕作博士が委し

く述べられて居るから、茲には敢へて書く事はしないが、只一つ斷

つて置くのは、一口に決闘と云つても、實は種類のある事で、一は、

遺趣も遺恨も無い、云はゞ相談づくで切り合ふのと、一は、何等か

深い怨恨を含んで、名譽の爲めとか、権利の爲めとかに、名乗り掛

けて果し合ふのとある。そこで僕は其意味からして、前者を血闘と

名づけ、後者を決闘と命名する。——血闘とは、勝敗を眼中に置か

ず、只血を出し合ふに止めると云ふ意。決闘とはこれに依て、日頃の遺恨を解決すると云ふ意だ。

さればこの決闘には、戀の遺恨もあれば、金錢上の遺趣もあり、一度此場に臨むが最後、命を的に掛けねば成らぬから、滅多に手は出されぬが、それでも相手に挑まれた以上、之に二の足を踏む未練者は、男子の風上に置かれぬと云ふ、社會的制裁も自からあるのだ。それに付いて、こゝに面白い話がある。而もそれは僕の知人で、今は東京の實業界に、多少頭角を現はしつゝある、若紳士某の實驗談だから、そのつもりで聞いて貰ひ度い。

某！本名はわざと憚つて、假に畑上玉一として置く。十五六から

伯林に留學して、中學全課を卒業し、進んで工科大学に入つて、専ら機械學を研究して居た。太り肉の而も丈高く、日本人としては天晴れ大男であつたが、その癖顔には愛嬌があつて、始終ニコ／＼して居るので、留學生仲間にも評判好く、其頃駐在の公使夫婦からも、常から可愛がられて居た。

尤も今から十五六年前の事で。日露戦争も無ければ、日清戦争さへ始まらず、随つて我帝國の國威も、彼の歐洲大陸に在つては、漸く行燈程より光らなかつた頃だから、畑上の如き有望な青年も、彼等の青い眼玉には、寧ろ輕侮の種となつて居た。中にも大學助教の、マイヤアと云ふ生意氣者は、常から東洋嫌

ひの上に、なまじこの畑上の、學事に熱心に成績も優等なのを、却つて心憎く思つて、動もすれば侮りがましい、無禮な舉動に出づるので、血氣の畑上は心外でたまらず。これが同輩であらうなら、疾うに鐵拳の二つや三つ、その髀面にも見舞申して居るのだが、何を云ふにも先方は助教、かりにも先輩であると思へば、ちつと腹の虫を殺して居た。

すると、ある日學校で珍事が出来た。それは同じ教室の中で、ある一人の學生のナイフが、何所へか紛失したと云ふ事だ。それも只のナイフなら、別に騒ぐにも及ばないが、何でも英國製の上等物、而も父の遺物だとか云ふので、持主は大層惜がつて、例の助教に

訴へ出た。

助教はそれを聞くと、氣の毒がつて一所に探しはじめたが、其時彼は畑上に向つて、最も輕蔑した、と云ふよりは、てつきり此奴と云はぬ計りの、嫌疑の態度で取調に掛つた。

「君の衣兜を見せたまへ！」

「さア十分に見て下さい！」

畑上は無念を耐へながら、しばらくマイヤアの爲すが儘に委せて居ると、マイヤアは猿眼で、畑上の身體中を檢めても、ついにナイフが見當らないので、少しは勝手の違つた様に、
「チヨツ！」

と舌打をしながら、

『もう何所へかやつてしまつたナ。』

と、獨語の様に云つた。それは極めて聲低く、殆んど口の中で云つたのだが、生憎畑上の耳に入つたからたまらない。日頃から締め締めて居た、堪忍袋の緒はプツリと切れて、怒は忽ち心頭に起り、

『何を失敬な！』

と云ふが早い、有合ふ自分の定木を取つて、今しも引返して行くマイヤアの、肩口目がけて投つけた。

『ア、痛た！』

と云ひながらマイヤアは、後を振り向いて睨め付けたが、流石に此

所ては手出しをせず、其儘無言で出て行てしまつた。

居合はせた同級生は、マイヤアの過言を難する者もあれば、畑上の疎暴を責める者もあり。しばらくはガヤ／＼して居たが、結局ナイフの行方は解らず、不得要領で其日は済んだ。

所がその次の朝、畑上はカツフエイを飲んで居る所へ、宿の下女が郵便と云つて、持つて来た一通は、珍らしくもマイヤアから。明けて見ればこは如何に、

『今日の貴殿の舉動は、明かに余を侮辱したものである。其後貴殿は、何等謝罪の舉に出でぬは、増々余に敵意あるものと認める。依て余は名譽の爲に、茲に決闘を申込む。』

と、云つた様な文言である。

「フ、ッ！」

と畑上は思はず笑つた。成る程昨日の自分の仕た事は、先輩たる助教に對して、全く禮を缺いた所爲に相違無い。自分が假に彼の位置に立てば、無論腹を立てずには居られぬ。然し又考へて見ると、自分にこの暴舉を敢てせしめたのは、彼も大いに責がある。常から輕侮を重ねた揚句、昨日のあの一言は何事だ。彼に定木の一撃が、それほど名譽を傷けたとすれば、我にも無禮の一言が、深く人格を傷けた。彼怒らば怒れ、我も何ぞ憤らずに居られよう。よし、この申込確に受けた。決闘の相手してやらう。と、そのまゝ、ペンを取り

あげて、さら／＼と二行三行、承諾の旨を答へたのである。

但し決闘をすると成ると、双方から然るべき介添人を出して、この介添人同士が、場所、時間、武器等を、夫々打合せるのが作法だ。畑上は朝の食事を済ますと、直ぐ親友の星村を訪づれ、言葉短かに昨日からの次第を語つて、自分の介添人に成つてくれと頼んだ。頼まれた星村、何て肝を潰さずに居やう！

「貴様それは正氣か？」

「無論正氣ぢや。」

「それは不可。たとひ先方は獨逸人の習慣で、さう云う事を申込んて來やうとも、日本人たる君として、必しもこれを受付けるには及

ばんぢやないか。』

『受付けるには及ばんと云つたつて、受付けた以上は退くわけには

いかんぢやないか。』

『何とか云つて取消したら如何か？』

『馬鹿な！一旦男子として承諾した事を、又取消すなどと云ふ事

は、日本人の出来ん事ぢや。君が迷惑なら、介添人は他の者に頼ま

う。』

と、畑上は動かかない。

星村は更に語を改めて、

『然し君、君は今何う云ふ體だと思ふ？日本にはお父さんもあるお

母さんもあるぜ。此所には只留學に来て居るのだぜ。』

と、強く云つて意を翻へさうとしたが、それも今は無駄であつた。

『それは僕だつて知らん事は無い。然し僕も日本武士の子だ。命の

爲めに名譽を棄てやうとは思はん。一身の爲めに國體を傷ける事は

出来ん。勝敗は時の運、生死は天の命、僕の決心は動かんのぢやか

ら、君は只、介添を承諾してくれるか如何か、否か應か、それ丈云

つてくれれば可いのぢや。』

と、飽くまで思ひ込んでの言葉だ。

星村も今は退引ならず、

『よし、それでは介添に成らう。』

と、遂に承諾はしたものの、内心は尙賛成はせず、時宜によつては公使まで持ち出して、無理にも中止させやうとまで思つて居た。所がまた思ひみや、その日の夕方になると、先方はまた介添人某を通じて、妙な事を云ひ込んで来た。それは他でも無い。——決闘は行掛り上止むを得ぬ事だが、君も大いに春秋に富む身、吾輩もまだ未來のある體だから、何方に怪我があつても約らん。付いては當日の武器は、互ひにピストルを用ゐる事にするが、撃つ時は共に天を的にして、わざと當らぬ様に放さうては無いかと、かう云ふ事である。

互ひに天を狙つて撃つ、云はゞ決闘の八百長だ。之を聞いた畑上

は、腹を抱へて笑つたが、星村はまた、眉を開いて喜んだ。無論先方から斯う云つて来るものを、強つて此方で否むにも及ばぬと、早速承知の旨を答へて、さて當日を待つて居た。

總じて斯う云ふ決闘は、成るべく人知れず行るのが常だから、此時も場所は郊外の森の中、時間は夜の未明と定めて、定め時間に定め場所へ、定め武器を携へ、定め介添人を連れて、双方から立ち現はれた時は、無論一種の感が起つたに相違無い。

然し實は八百長の決闘、考へて見ると吹き出し度くもならう。これを一向澄ましたもので、マイヤアは定め位置に立つた。畑上も同じく真面目な顔をして、定め地點に立つた。介添が型の如くは

からつて、いよく双方は武器を構へた。一、二、三！合圖と共に放つた一發！

ドーンと符を起して、空に飛んだのは畑上の弾！彼は約の如く天を狙つたのである。

然るに何事ぞマイヤアの弾は、ヒューと畑上の耳元に響いて、肩の邊をサツと擦つた。

アツと云ふと流石の畑上も、一時は其所によるめいたが、踏み止まつて、

「あのれ、卑怯なッ！」

と、更にピストルを構へた時は、何事ぞマイヤアは、草の上に伏し

て居た。

驚いたのは介添の星村、

「やられたか？」

と思はず畑上に取りつくと、

「イヤ、大丈夫ぢや。然し失敬な奴！」

と、怒髪は天を衝いて居る。

所へ飛んで来たのは先方の介添、

「済まん、實に済まん。今のは全く手許が狂つたのです。」

と、我事の様子に狼狽へて、ひた詫に詫びるのである。

マイヤアはと見ると、何とも云はれぬ顔をして、澁々草の上から

起き上がり、此方へ重い歩を運んで、これもさも面目無げに、和陸の握手を求めに來た。

畑上も此場合、もはや多くを云ふを好まず。只毅然とした態度で、その握手を冷かに受けたが、何やら云はうとする星村を制して、無言で其場を引揚げてしまつた。

無言！何思つたか畑上は、爾來此一件に付いては、何人にも決して語らなかつた。

然し悪事は千里である。此日此場合のマイヤアの舉動は、忽ち校内の評判と成つて、誰一人之を蔑まぬ者は無い。

眞實手許が狂つたとする？大事に望んで度を失ふ、蔑げ果てた未

練者だ。それとも故意に約を破つたとする？ 敵を不意に斃さうとした、言語同斷の卑劣漢だ。

何れにしても斯る小人は、所詮共に齡し難いと、同じ獨逸人仲間から、殆んど蛆虫の如く爪弾かれて、彼は遂に職を褫がれ、土地を追はれてしまつたのである。

之に反して畑上は、天晴れ武士道の權化として、頓に内外人の崇敬を受けた。蓋し此一件は、彼地に遊ぶ程の者の、殆んど誰知らぬ者も無い話であるが、而も亦誰一人として、畑上の口から聞いた者は無かつた。偶々之を質す者があつても、彼は顧みて他をのみ云ふ。

(四十年稿)



八 新嘉坡の一夜

新嘉坡と云へば、赤道を去る一度半、四季共に九十度以上の炎熱には、さながら釜の中に蒸される如く、凡そ此邊に生まれる程の人は、汗と共に勢力を溶解されて、勢ひ惰弱にならざるを得ない。

まして此邊は、一帯に英吉利の領土に成つて、此所に生へぬきの土人等は、皆英人の指揮の下に、あくせくと追ひ使はれて居るのである。黒は白に敵はないとは、只に基盤の上のみては無。

去年十月の中旬、余は歐羅巴から歸朝の途次、此所に二日ほど碇泊した。けれども余は、已に先年渡航の際に、此地は一通り見物して居るから、今更この暑いのに、塵埃を浴び、汗水を流して迄、また上陸するにも及ばぬ話と、船の中に留まつて居た。丁度その晩は舊暦の仲秋で、而も名物の夕立は、晝の中になつぶり降り盡して、夕方からは空に綿屑ほどの雲も無く、月には持つて来いの天気である。

『どうだ……今夜は久し振で好い月見が出来るぜ。』

『さうだなア……かうして甲板は椅子を列べて、月見の宴を開くのも妙だなア。』

「イヤ甲板の月見もいゝが……何しろ船の碇泊中は、荷揚の音が喧しくて困る。それよりは、寧ろ此邊で小舟を備つて、この港内を廻つたら面白からう。」

「ウン、それは好い考案だ。ぢやア何所かて端艇を備つて、今夜は月下の舟遊をやらう。」

「大賛成〜！」

とは、同船の友四五人が、夕飯後の逍遙を、後甲板に試みての相談であつた。

話がかう極まると、各自に手分をして、或者はボートに酒肴を誂へ、或者は端艇中の救物を用意し、さて余は他の友一人と、その端

艇を備ふべく、一足先に船を出た。

本船を出て、例の大棧橋の西の詰まで行くと、其所に端艇が澤山ある。船頭は土人六分、支那人四分で、何れも屈竟な骨組の者ばかり。頬骨高く尖り、眼は深く光つて、總身赤銅色に焦げて居る工合は、運慶の作とも銘の打ち度い位だ。

此等の船頭は、余等の顔を見ると、もう前後左右から取りまいて、先を争うて船をすゝめるのである。元よりそれを備ひに來たのであるが、かう五月蠅くすゝめられると、又厭に成るもので、只手を左右に振りながら、わざとそこを行き過ぎると、此の船の溜場の、一番隅の所に、少し離れて一艘の端艇があつた。

これには十五六歳とも思はれる、土人の少年が只一人、今がた辨當を食ひ了つたと云ふ體で、手を水で洗つて居たが、余等を見ると、急いでその手を腰巻で拭きながら、

「旦那！船は如何です？」

と、覺束無い英語に手眞似を交ぜてすゝめたが、それも少しは遠慮の體で、二言とは強いもせず、余等の顔を打守つて居る。そのまた顔が、矢はり黒く焦げては居るが、他の土人や支那人の様に、憎體にも見えないので、

「どうだ、此奴の船がいゝぢやないか。」

と、余がまづ云ひ出すと、友も點頭いて、

「よし、此奴に談判してやらう。」
と、此所で此の少年船頭に、二時間ほど港内を周遊すべく、相當の代價を極めて命じた。

此時まで、執念くも後をつけて來た、以前の船頭の中の、二人計りの支那人は、これを見て大きに憤慨して、この少年船頭に向ひ、何か高聲に怒鳴りつけて居たが、少年はそれに答もせず、靜かに出船の用意をして居る。

所へ他の友等が、酒肴と敷物をボーイに持たせて、此所へやつて來たから、やがて此の船に乗り込むと、少年船頭は心得て、巧みに櫓をあやつると見る間に、船はもう入江の中央へ出た。

豫て期して居た通り、月はもう東の空に昇つて、波ははや金色にさらめいて居る。右手に續く島々、遠いのは淡く、近くのは濃く、さながら墨繪かと思はれ。左手の棧橋に碇泊の諸船は、帆柱に烟筒に、月の光を一杯に浴びて、甲板に立ち働く水夫も、歴々と見えるほどである。

「實に好い景色ぢやないか。」

「それに第一涼しくて、こんな愉快な事は無い。」

「どうだ一杯やらんか！」

「僕はラムネの方をもらはう。」

「肴には何かがある？」

「サンドウヰッチにバナ、を持って來た。」
 「さアみんな此所へ手を出せ、手を出せ！」
 と、用意の酒肴は中央に開かれて、一船五人の客は、或は飲み、或は食ひ、或は吟じ、或は唄ひ、實に愉快な舟遊と成つた。
 少年船頭は無言で、頻りに舟を繰つて居る。其中に舟は只ある瀬を越えて、島と島との間に入つた。

椰子丈は知れて居るが、他は名も知れない木や草は、晝見ると真赤に見える絶壁の上に、夜は真黒に生ひ茂つて居る。その陰から灯の洩れるのは、其所にも人の住むらしく。

又此方の洲を見るに、人の丈より高く伸た、蘆とも思はれる叢に、